

---

# 図書委員会の恋愛事情

豆吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

図書委員会の恋愛事情

### 【Zコード】

Z0670X

### 【作者名】

豆吉

### 【あらすじ】

泰斗高校図書委員会は共学なのに女子しかいない委員会。

メインカップルは第1章の一人ですが、メインの二人視点の話と視点を変えて図書委員プラス1の恋愛事情を連作風にしていく予定です。

視点は変わつてもメインの一人の進展具合を、ゆるゆると織り込んでいきます。

前作同様まつたり・のんびり・都合主義になると思います。

R15は、ほとんどないと思いますが念のため。

## 第1章・岡崎 涼乃の困惑 -1（前書き）

すばり、第1章の主人公の好みは私の好みでもあります（爆）。

私、岡崎涼乃は2年1組、部活はしていないが図書委員を2年連続務めている。

私の通う泰斗高校は有数の進学校だけど、服装に関しては制服を必ず崩さず着用のことという以外に規定がないので、目立つ人というのは少なからずいる。

とはいって、せいぜい茶髪にしたり化粧したりする人がいるくらいで、金髪とか緑、ピンクなんてお花畠みたいな人はいない。生徒自治がモットーだから、自分たちで規律を守るつてことなんだろうな。

私はというと、一度も髪の毛を染めたこともないし顔のケアは日焼け止めくらいで化粧もしたことない。だいたい、お金を使うなら私は好きな映画や小説、漫画にお金をかける。

中学のときは、「オタク」と一部の田立ち男子から嘲笑されて辛かつたけど、この学校には、人のことを嘲笑するヒマがある人間はひとりもいない。頑張つて泰斗に入学してよかつたと心から思つている。

今日のお昼休みは、天気がいいので外のベンチでお弁当を食べる。おやつに調理実習で作ったマドレーヌもついている「ージヤスさだ。「そういえば、涼乃見た? 早川くんの机のうえのマドレーヌの」」と友人の川田 唯ちゃんが話し出す。

唯ちゃんは高校に入学してから「おかざき」と「かわた」で席が前後したことから親しくなった。唯ちゃんは背が高くショートカットの凛々しい女の子だ。調理部に所属している。

調理部は、ときどきモニタリングとして図書委員会にお菓子を提供してくれる。私たちは料理に対してアンケートに答える。どうして、こんな協力関係ができたかというと、図書委員長の古

川先輩と調理部部長の長谷川先輩が親友同士だからだ。

「見た。さすが早川王子だよね。貢物で机が見えなかつたよ、恐るべし。」ぱくん、とマドレーヌを口に入れる。

「うーん、上出来。おいしー。しあわせー。

「早川王子・・・つて涼乃・・・確かにあの山は貢物だよね」唯ちゃんは噴出した。

早川王子、というのは私が親しい人の前でだけ呼んでる名前で、本名は早川 圭吾といい、目立ち男子として学年でも知られた存在。髪の毛はやや栗色でスラリとしたうえに顔も目鼻立ちが整い、笑つたときに歯がキラリーンと輝いていても違和感のない顔立ちをしており、さらに背後にバラをショットしても「ま、似合つからいいか」と思われる類のイケメンである。

性格もまた悪くないときた。そいでもつてテニス部といつまに「テニーリ」を具体化したような人なのだ。

なぜ、私が早川王子と密かに命名するに至つたかといふと彼はとても女子にもてるからだ。

1年生のオリエンテーリングのときは彼のいる班に女子が殺到しちやつてなかなか決められなかつたとか、バスの席決めでも女子同士がもめたとか、その手のエピソードで本が一冊できそうだ。“女子同士の揉め事の裏に早川あり”といのは既に定説となつてゐる。

ああいう「いかにもモテまつせ」なタイプは苦手だな。私はもつと端正な感じで、なおかつ白衣が似合うメガネ男子なら完璧だ。化学の橋野先生なんて私にとつては相当萌えだ。私は理系科目は苦手だけど、理系人間はすてきだー。なんてことを、お昼に唯ちゃんと話していた。

このとき私は、まさか早川くんに聞かれているとは思わなかつたのである。

## 第1章・岡崎 涼乃の困惑 -1（後書き）

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

2作目を書いてしました（汗）。

しかも現代です。学生の頃なんて遠すぎて覚えてないのに・・・

そのぶん、妄想でカバーしていきます。

ですので「こんなやついないし、納得できないし」と思われる方は

スルーしてくださいね。

今回、思い切ってR15をつけてみたのですが、果たして作者が書けるのか？

## -2 (前書き)

涼乃、早川のことを「うつねり」、「早川王子」と呼んでいたのがバレたうえに逃亡の巻。

授業が終わると、唯ちゃんは部活に向かい、私は当番じゃないので家に帰る。

かばんを持つて唯ちゃんと途中まで一緒に行くことにした。

ところが、帰ろうとする私を「岡崎さん」と呼び止める人がいた。振り向くと、そこには早川王子・・・もとい早川くんがいた。彼も部活に行くのかテニス部のバッグを肩からかけて私をじっと見てる。

「岡崎さん、これから少し時間ある?」

「うーん、早川くんに費やす時間はないな・・・なんてことは小心者の私は、もちろん言えず「少しなら。」と無難に答える。

唯ちゃんが「涼乃、なんかしたの?」といつそり聞いてきたが、そんなわけないだろ?。近寄りもしないのにさ。

「わかんないけど・・・唯ちゃん。時間迫ってるから部活いきなよ。」とささやきかえす。

「うん・・・今日の夜電話するね」と唯ちゃんは部活に向かった。

いつの間にか、教室には私と早川くんの一人だけになつていた。もしや賭けか何かで、他に誰か隠れてるのでは?と私は思わず周りをきょろきょろしてしまった。

「なにしてんの?岡崎さん」

「え?えつと見事に誰もいないなーと思つて。早川くんは部活行かないの?」

「今日は遅れるつて部長に言つてあるから

テニス部の部長・・・ああ、あの黒縁メガネが素敵に似合つあの人か。一本筋が通つてしまつとした感じがいいよなあ。あの人も白衣が似合いそうだ・・・早川くんとは真逆だな。

はつ、いかん。早川くんの存在を忘れそうになつたよ。現実に戻らないと。

「そつなんだ。それで私に何か用でしようか」なぜに敬語、私。

「あのさ、・・・・・岡崎さんはメガネ白衣が好きなの？」  
「なぜそれを知つている。

びつくりした私の顔を見て、早川くんは「今日のお昼、俺、岡崎さんと川田さんがお昼食べてる裏に通りかかったときに聞こえちゃつて。早川王子・・・つて、俺つて王子なの？」

「のときの私の心境は「サエさんにいたずらがばれた力 オ」いや「ママに〇点のテストを発見されたの 太」もしくは「ダメだ、おもいつかない。

「俺だつて、別に好きこのんで、ああいう状況じゃないんだよ・・・

「はあ・・・・そつか。」めんなさい。」自分のしらないところで変なあだながついているのに遭遇したら、不愉快だよなあ。私が全般的に悪いから、ここは謝罪だ。いつも呼ぶのはやめないけどさ。「いや・・べつに謝らなくともいいよ

「おお、笑つた。なんとも思つていない私でも、なんだかまぶしいぞ。

「早川くん・・・それで、私に用つてなに？」

「岡崎さん。俺、岡崎さんのこと、1年のときから好きなんだけど、俺とつきあつてくれない？」早川くんは意を決したように私に告げた。

「のとき、私がしたことは・・・・再び誰かが見てるのではない  
かと、きょろきょろあたりを見渡したことだった。賭けでもなきや、  
こんなキラキラ王子がオタク女子に告白するか？漫画じやあるまい  
し。

私は一瞬固まつたあと、黙つて早足で教室を出たのだった。

「え？岡崎さん？？」と私の行動に呆然とする早川くんを残して・・

•  
•  
•

## -2 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

涼乃、早川王子を置いて逃亡。それだけ驚いたところとしておいてください・・・

- 3 (前書き)

王子は意外と強引だったの巻

その夜、メールではなく電話してきた唯ちゃんに私は、あの出来事を話した。

あとは寝るだけなので自分の部屋でパジャマでじっくりしながら話す。

「ひやー、なんだか私が帰ったあとにビックリな展開だね。」

「当事者の私は、もうどうせクリだよ」

「涼乃。あんた、逃げたのはまずかつた

「ためでし。」明田 学校行なはる早川王子は諭りた。「えい。」早川王子はうつて接触すればいいのか・

「ヨリの返事をするにしたがて、はじめて切迫なこと叫三田子が氣の

毒でしょひがー

確かに、あんな呆然とした早川くんは初めて見た。

次の日、「はー、どうやつて早川王子と接触すればいいんだ・・・・・。」と気が重くなる。

教室に入りクラスメートと挨拶をしながら、自分の席へ。

あー、とハシヨハカナーと机で頭を抱えてため息をついてると、うはこら、岡崎アレハニカラガバする。

見上げると、早川くん。今日も爽やかオーラが満載だ。

「おはよー、早川くん。」これは謝罪のチャンスなのでは…！

あのさ、早川くわん、今日の帰り、また教室は残れる?  
——早川くんは、もしかして謝罪のチャシスを作つてくれたのか。

なんていいひとだ、早川くん！

「うん。大丈夫。」と私が言うと、ほつとしたのか「じゃあ放課後

さつそく、お昼に唯ちゃんに報告。

「唯ちゃん、今日の放課後に謝罪ができるそつだよ」

「よかつたね。ちゃんと謝るんだよ」

「うん」私は、朝のどんより気分がすっかり晴れて、爽快だった。  
「あ、お弁当が美味しい。やっぱり食べるときには気分がよくな  
いとね。」

授業が終わり、私は約束どおり教室に残っていた。

早川くんは部長に断りでもいれに行つたのか教室にいない。私は誰もいない教室で読みかけの文庫本を読みながら待つことにした。

「「めん。待つた？」と早川くんが教室に入ってきた。

「んー、そんなには。ちょうど読みかけの本が読めてよかつたよ。」

「そうだ、ここで謝り。」「早川くん。昨日は、いきなり帰っちゃ  
つて「めんなさい」私は頭を下げた。

「あ・・・あー、いいよ。驚いたんでしょ？」「いきなり聞いて」早  
川くんが言つ。

「でも、中途半端に帰つちゃつたから、悪いことしたなあと想つて。  
どうせ元に戻る、昨日聞いたことは断るつもりだつたし」

「・・・理由、教えてもらつてもいいかな」

「まず、私と早川くんの間に接点ないし。話したこともないのに、  
いきなりのあれは驚くよ。それに、早川くんつて華やかで気後れし  
ちゃうし。私、平和かつ地味に高校生活送りたいんだよね」

「俺個人のことは、どう思つてる？」

「んー、よくわからなー。さつきも言つたけど話したことないし。  
「じゃあ、よく分かるよになつたら、考え方直してくれる？」

「はい？」

「まずは、友達からだな。メルアドの交換しようつよ。携帯は？」

「ええつ」

「ほり、赤外線で交換しようよ」

「これは、イヤだといえない雰囲気じやないか。私は渋々携帯を出

した。

「アドレス交換、完了。俺はあきらめ悪いよ、覚悟してね」  
につ、こり笑つた早川くんは、王子じゃなくて魔王に見えた。  
ど、どうしてこんな展開になつたんだろう・・・。

### - 3 (後書き)

読みありがとうございました。  
誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

王子のとつた行動は涼乃を「困惑」させました。といつていつて「困惑」と題名につけてみたのですが・・・  
次は違う人の視点で、その人の恋愛事情です。  
涼乃が萌えだつた「彼」です。

第2章・橋野 誠介の忍耐 -1 (前書き)

涼乃が白衣萌えだと言つていた彼視点の巻

僕は泰斗高校・化学教師の橋野 誠介28歳、独身。通りかかった2年1組の教室で実に興味深いものを見た。

学校でも目立つ生徒の一人早川 圭吾と図書委員の岡崎 涼乃が二人だけで教室にいるのだ。

しかも、状況から察すると早川のほうが岡崎に告白したといふらしい。

岡崎の顔が半ば呆然としたままのは、いったいどういうことなのか。岡崎というのは図書委員のなかでも、いたつてマイペースな性格で、あまり物事に動じるところを見たことないだけに逆に心配になってきた。告白じやないのか？

「まだいたのか。もう帰りなさい」とりあえず、ドアを開けて声をかける。

「は、はいっ！」と岡崎はあせったようにあたふたと帰り支度を始めて慌てて出て行った。

早川のほうは部活に行くらしく、エナメルのかいバッグをななめがけして、のんびりと出て行った。

数日後。

「・・・・・というようなことがあつたんだよ。藤村はどう思ひ？？」

「こは居酒屋。金曜日といふことで店は混雑していた。

僕は、一人の女性と酒を飲んでいた。図書室に司書として勤めている藤村 恵理子。彼女と俺はかつて泰斗高校で同じクラスだった。二人とも母校に勤務しているわけだ。

「へえー。岡崎がねえ。ま、委員会のときに気にかけて見てみるよ。

僕がウーロン茶ジョッキを飲んでいる間に、藤村はビール ハイ

ボール 芋焼酎水割りに突入している。顔は赤くならないし、状態も変わらない……こいつはザルだ。

同じクラスのときは、お互に留めることもなく卒業したのだが、大学卒業時のクラス会で再会したときにお互に泰斗高校に勤めることが判明して、それいらい一人で食事をしたりするようになつた。

それにしても、高校のときはおとなしそうな外見と内的な性格で目立たなかつた藤村。再会したときには「豪快な男前」に変化していたのには驚いた。藤村いわく「高校のときは内氣でもよかつた。大学に入つたら自分で動かないといけないと分かつたから、頑張つてる」だけで、本質は変わつていないうらしい。僕は、今の藤村のほうが好きだから、どつちでもいいけど……

そう。僕は藤村に片思いをしている。藤村も俺の誘いを断らないので嫌いではないと思いたい。が、僕がほのめかしても、こいつは全然気づきもしない。

「しかし、早川か）。岡崎、押し切られたのかもね。だつて、岡崎の好みと真逆だもん、早川」

藤村は岡崎と好きな作家が同じとかで気が合つらしく、わりと色々話すらしい。教師とは違うから友達感覚で話せるんじゃないの？ という藤村の分析だ。

「は？ なんで藤村がそんなこと知つてるのさ」

「図書委員会のガールズトークで、“男性のどんな服装に萌えか”つて話になつてさ）。へつへつへ。岡崎の好みはずばり、白衣メガネ理系男子。橋野なんかは「ビストライク」でしょうね。橋野先生の白衣姿はいいです」とか言つてたもん。私も白衣メガネ理系男子は嫌いじやないからさ、気持ちは分かるわね。橋野は白衣似合うも

ん

なんつー会話をしてるんだ。……しかも、自分をちやつかり

「ガールズ」に入れてるあたり、つっこんだほうがいいのか？  
それにも、普段はこういうことを言う人間じゃない。もしか  
して、酔っ払ってるのか。

「藤村、酔ってるのか？」

「はああああ？酔ってるわけないじゃ～～ん。はしのつたらな  
に言つてんだか」

・・・・間違いない。よつぱらに誕生だ。

「おい、出るぞ。送る」

「は～～い。わっかりました～。さいふ～さいふ～～と」

「あとで割り勘してくれればいいから」

「そお？わつるいわねえ～」すでに出来上がりつつある藤村を連  
れて僕は店を出たのだった。

## 第2章・橋野 誠介の忍耐 - 1 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

この彼と彼女の話でR-15を書きたいと思つてます。

といつても、この章ではありません。

もうすこし後になつてから予定しております。

-2 (前書き)

橋野、ベタな状況で邪魔されるの巻

「あああおおおーーー」とおよそ色氣のない声で、僕は目が覚めた。

昨日、藤村を僕のアパートに連れ帰つて（彼女の家はちょっと遠いのだ）、自分のベッドに寝かせた。僕は、ソファで寝た。手を出さずなら両者合意のうえじやないとね。

「ここは、どこ？？」とベッドでぐいぐいそしている音がする。  
そろそろ顔を出したまづがいいかもしれない。

「おはよう。藤村。」これは僕の部屋で、ちなみにそれは僕のベッド  
「ひやおおう！－！橋野！－な、なんですよ、橋野の部屋？」  
「色氣のない叫び声だなあ。そう、きのう藤村が酔つ払つてたから  
僕の家に泊めたんだよ」

「そりやーーー、すみません・・・「ーん、やつちまつたか」頭を  
抱える藤村。

「服は・・・着てるけど・・・

「酔つ払いに手を出す趣味はないよ」

「はーーーー、そつか。じゃあ、私帰るわ。悪いけど、洗面所貸して  
くれる？せめて髪の毛をどうにかしないと、帰れないわ」と即ベ  
ッドから出ようとした藤村を思わず押し戻す。

「冗談じやない。僕はこのチャンスに自分の気持ちをきちんと打ち  
明けるつもりなんだから。

「あのわ、藤村・・・

「ん？」押し戻されたことに驚いているようだ。

「僕は藤村が好きだよ。藤村はどう思つてる？」

藤村は一瞬固まつたものの口を開いた。

「私ね、外見と性格にギャップがあるらしくて、いい感じになつた人とも「なんか違う」て言われて。もー、恋愛面倒つて思つてたんだ。自分自身を見てくれる人なんて、いないんじゃないかなと」

「それで？」

「でも橋野はさ、私の性格が分かっても変わらないじゃない？それがとてもうれしかったんだよ、橋野」

「今の藤村の気持ちを教えてくれないか？」

「橋野のこと、すきよ」

「いま、しらふだよな」

「酔っ払って告白なんかしないわ」と顔を赤らめる藤村。

じゃあ、こういうことをしてもいいかな。両者合意のうえで・・・と僕は藤村を押し倒してキスをした。藤村もキスに応える。

そのまま、藤村も抵抗しなかったので、僕は藤村をいただこうとしたら・・・・・・  
ピンポン。インターほんの音が室内に響いた。  
これで、僕たちは我にかえった。あわてて身づくろいをし、藤村は洗面所へ。僕は玄関へ。

結局、この日は藤村と一緒に彼女の部屋へ行き、そのまま健全なデートをして、初めて「恋人同士」として過ごしたのだった。

早く彼女を食べてしまいたいけど、片思いが成就したからとりあえず理性を保つてる僕。

でも、そんなに待てないかもしれない。

「今度、白衣着て迫つてあげようか。」

「ばつ・・・ばかじゃないの？？・・・ちょっと興味あるけど・・・・

・・・

## -2 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

橋野の「忍耐」が実つたのと、「忍耐」を試された話になりました。  
次は違う人の視点で、その人の恋愛事情です。  
涼乃の章に、ちょっとだけ名前がでた人です。

第3章・古川 瑞穂の再起 - 1 (前書き)

図書委員長、片思いのまま失恋決定の巻

私、古川 瑞穂は学校で化学を教えている橋野先生に憧れている。先生の授業はわかりやすくて楽しい。そして先生の立ち居振る舞いはいつもきちんとしている。

メガネの先生もすてきだけど、ときどき見かけるメガネなしの顔もすてきだ。

誰にもこの気持ちを言わないで、このまま卒業していくのは当たり前だと思つていろけど・・・

だからと言つて・・・神様。もしいるならあんまりだわ。

私はその日、参考書を見ようと駅に近い大きな本屋にいた。参考書も見たいけど、好きな作家の新刊もチェックしちゃお~と、うきうきしていた。

土曜日の昼間は家族連れやカップルも多い。新刊はなかつたけど、目当ての参考書を見つけた私は、カフェで一息つくことにした。窓際に座つて、ぼんやり外を眺める。

すると、そこを通り過ぎていくカップルの中に自分の知つてゐる顔を見つけた。

橋野先生・・・隣にいるのは司書の藤村さん・・・。二人は手をつなぎ楽しそうに話しながら歩いていく。そこには先生二人じやなくて、男の人と女の人。

そういえば、二人は泰斗高校で同じクラスだつたと藤村さんが言つていた。女子ばかりの図書委員会で蔵書の整理をしたりする日にはなぜか、必ず橋野先生が手伝いにきていた。

そつかー、そういうことか。ちえーつ。傷ついたわけじゃないけど、確実に私の心に苦いものが広がつてゆく。

学校で図書委員長を務めているため、私は司書の藤村さんとは結構仲がいい。図書委員は皆、仲がよくて放課後の当番も全然苦痛じゃないはずなのに、今日はなんだか足が重い。

当番のため図書室に向かう途中で、ふと見た窓の外。私は同じ委員の2年の岡崎ちゃんが中庭にいるのを見つけた。彼女の横には、なぜか同じ2年生の早川くん。整いすぎた容姿で目立つ彼は最近、岡崎ちゃんに話しかけていることが多い。そういうえば先週……と私は岡崎ちゃんの様子を思い出していた。

委員会のミーティングのあと、私は岡崎ちゃんに、「最近、早川くんと一緒に何をよく見かけるけど仲良くなつたのかと、軽い気持ちで聞いてみた。

「最近、女の子からの視線が痛いんです……うひ。早川王子のせいです」と岡崎ちゃんは委員会のミーティングのあとに机につづ伏せになつた。ちなみに早川王子とは岡崎ちゃんが彼につけただ名で、図書委員の間で定着している。

瑞穂先輩、聞いてください」と、岡崎ちゃんは「王子はいつもキラキラしてて、オタク女子の私にはまぶしそぎるんです。自分のことを知つてほしいってメールをくれるんですけど、私みたいな人間からすると何書いていいのか返信にも気を遣つんですね」とぼやきつぱなしだつたつた。

今だつて、話しかけてくる早川くんを、岡崎ちゃんは適当にあしらつている……よう見える。岡崎ちゃんは、友人を見つけたみたいで、早川くんに断りをいれて、わざとやつちに向かつたようだ。

岡崎ちゃんの話から察するに早川くんは彼女と「友達になるといふから始めて、いずれは彼女に」って思つてんだろうなあ。

「おい。なに庭をぼんやり見てんだ……なんだ、瑞穂も早川のフ

アンかよ」

横にきて話しかけてきたのは、この学校で生徒会長をしている平

田 孝一郎。

「なんだ、孝一郎か。」橋野先生だったり、さつと十羅田に見た一人を思い出してしまつ。

「なんだ、孝一郎か・・・なんて俺に対しても反応をするのはおまえくらいだ。瑞穂」

孝一郎とは家が隣同士で、幼稚園からなぜか高校まで同じという腐れ縁。しかも、昔から何かといふといふは私にからむんだ。

外面は優しげな顔立ちで物腰もソフトなやつだけど、本性は俺様。会長になつた時点で、たちまち独裁体制を整えた切れ者もある。

「それで、お前はこんなところで何してん。今日また番じゃないのか。」

「そうだ、当番! まつたくあんたと話して、いらん時間を取りちやつたじやない。じゃーね」と言い私は早足で図書室に向かつた。

後ろで孝一郎が「・・・やつぱり瑞穂は鈍いよなあ」とつぶやいていたことを、私は知らない。

### 第3章・古川 瑞穂の再起 - 1 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第3章は、図書委嘱長の古川さんが主役です。

瑞穂、会長からお呼び出しの巻

図書室の扉を開けると、藤村さんと橋野先生がカウンターにいた。「古川が遅れるなんて珍しいわね。でも大丈夫、橋野先生がひまそ うだったからカウンターに座らせといた」と藤村さんがニヤリとカ ウンターに目をやる。

「おお、カウンターに白衣姿の橋野先生。岡崎ちゃんがいたら「ひよほーい」と心の中でガツツポーズしそうだ。私もだけど」

「橋野先生、すみませんでした。交代します」「助かった。どうして私のところに女子ばかり並ぶのかなあ。ところで藤村さん、私はそんなにヒマじゃありませんよ。たまたま資料を探しに来てつかまつただけです」と言い、橋野先生はカウンターから離れた。

並んでいる女子の皆さん、すみません。あなたたちからの「なぜ、もう少し遅れてこない」という怒りのオーラを感じてます。「ええ、そりやもう。早川くんに押されてる岡崎ちゃんもこんな感じなんだらうづか……。

並んでいる人たちの貸し出しをすませ、図書室は少し静かになつた。

「今日は、なんだか女子生徒の貸し出しが多かつたですね。」

「短期間で、あんなに女子を集めなんて。ねえ古川、橋野先生つて「憧れの先生」つてやつ?」

「まあ……確かに人気のある先生だとは思います」……私は憧 れてます……。

「へー。それなら時々カウンターに座らせよつかな。図書室が活性 化しそうだ」

「……私は客寄せパンダですか」

「おおつと。まだいたんですね、橋野先生」

「カウンター手伝ってくれたら、探すの手伝つてあげるからセーチ

て言つたのは藤村さんですからね。わつわと手伝つてくださこよ  
いつもと変わらないように見える一人の会話だけど、やつぱりど  
こか違うんだよなあ。そして悔しいけど藤村さんも私好きだし、お  
似合いだよなあ・・・

「これ貸し出し」と田の前に孝一郎が本を片手に現れた。

「はい・・・つと、学生証出して。」学生証のバーコードと本のバ  
ー・コードを読ませると貸し出し完了。

「図書委員長。図書の件で話があるので、あとで生徒会に来るよう  
に。」孝一郎が会長仕様で告げた。

なんだ？もしかして、この間の購入書籍リストに不満があるのか？  
あれは、藤村さんと図書委員たちがせっせと頭ひねつて作成した  
努力の賜物なんだ。孝一郎にとやかく言われる筋合いはない。

「わかった。あと30分くらいで終わるから」というと、孝一郎は  
手をひらひらさせて図書室から出て行った。

図書室の受付時間が終わり、私は生徒会に向かつた。

「失礼します」と入つたものの、いるのは孝一郎だけだ。孝一郎は  
パソコンを見ていたが、私に気づくと「そこに座れ」と椅子を勧め  
てきた

「孝一郎、あんたのしもべ・・・じゃなくて他の役員は？」

「今日は生徒会の仕事はない」

「は？じゃ、なんの用なのぞ？」

「とりあえず、紅茶でも飲めよ。」と孝一郎は紅茶を出してきた。

## - 2 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

おかげでまで、3000PV突破しました。

視点がくるくる変わる作品なので、いさか分かりにくい作品だと思いますが、引き続き楽しんでいただければ幸いです。

瑞穂、流される? の巻

「おまえさ」と孝一郎が口を開いた。

「なに」

「橋野のこと、好きだう?」

「は・・はあ?」なぜに「いつが知っている!」しかも先生を呼び捨て!」

「だけど、橋野は藤村さんと付き合つてるよな。」

忍るべし、生徒会長。どこから、その情報仕入れた。

「おまえが橋野を見てるときの顔が先週とは違う。なんだかおまえ、泣きそうな顔をして一人を見るし、分からぬわけがないだろーが」

泣きそうな、顔・・・?

「瑞穂は昔から、外で我慢して家でこつそり泣いてるだう?」これは俺しかいない。泣くとすつきりするべ・・・俺のままで、我慢するな

「ばつ・・・」私は笑おうとしたんだけど・・・・目の前の孝一郎がぼやける。

私は涙を流していた。傷ついてないなんて嘘だ。私は橋野先生が好きで、相手の藤村さんも好きで。一人はお似合いだけど、見てるのは辛いし、くやしい。私だってきっと好きな気持ちは負けてなかつた・・・だけど、先生は藤村さんを選んだんだもん。

「・・・・」私はひたすら涙を流し続けた。孝一郎は、そんな私をなぐさめるでもなく、黙つてパソコンで仕事をしている。

私の涙が止みしが分かつたらしく、孝一郎は黙つて2杯目の紅茶を入れてくれた。

「飲んだら帰るぞ」

「うん・・・ありがど」

「少しばすつきりしたか」

「うん。なんか、これから一人を見ても・・・前みたいにしてようつて思えるようにがんばる。ありがと、孝一郎。あんたって、いい人だつたんだね。」

「・・・おまえは、俺をどう見てたんだ」

「外面のいい俺様

「・・・がつくりとする孝一郎。

「どしたの？孝一郎。」がつくりする孝一郎なんて、最後に見たのはいつだつたか。

「まったく・・・瑞穂。俺は、自分にメリットのないやつとは付き合わない。でも瑞穂だけは違つ。わかるか、この意味が「幼馴染だからでしょー。」

「おまえ、どんだけ鈍いんだ」

「むー。なによ鈍いって「私はちょっとむかつときた。

「失恋したばかりのおまえに、つけこむのはどうかと思つてたけど・  
・・・もういい。瑞穂、俺と付き合え」

「は？付き合つ・・・どこに？今からじや遅くなつちやうじやん」「今度は天然かよ・・・付き合つといつのは、彼女になれといふことだ。わかつたか鈍感瑞穂」

「は・・・はあー？！あんた、彼女いたでしょーが。近所の女子高の子」

「3ヶ月前に別れた。瑞穂が俺のことを男として認識してないのは分かつてたから、言い寄つてきた人間と付き合つてただけだ。」

「あんた・・・サイテー」

「サイテーで結構。鈍すぎるお前が俺に目を向けるのを待つてた俺がバカだつた。」

「は・・・？」

「とりあえず、お互いのメールアドレスは知つてゐし友達としては認識されてるからな。・・・あとは彼氏彼女になるだけか」

「えー、あんたみたいな俺様やだよー。私はもつと穏やかな人がいい」

「お前には俺がぴったりだ。俺にはお前がぴったり。．．．理想的だろ？ 失恋の傷を癒すには新しい恋が一番だからな．．．俺で手を打て。」

確かに孝一郎は嫌いじゃない．．．でも、私流されちゃっていいのか？？

とはいって、さつきの孝一郎の優しさにぐらつときてしまったのも事実。

「大事にするから、瑞穂。俺にしておけよ。」と孝一郎。いつの間にか、片思いのまま失恋したことよりも、目の前の孝一郎にどう対応したもんだか考えてしまった私であつた。

### - 3 (後書き)

読み「ありがとうございました。」

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

瑞穂の「再起」。いかがでしたか？

第4章・早川 圭吾の翻訳 -1 (前書き)

王子は実はヘタレなのか?の巻

彼女をはじめて見たのは、入試のときだつた。俺の隣の席に座つた彼女は緊張感たつぱりの教室で、深呼吸を始めたんだ。

俺はノートを見直しながら、その様子を眺めていた。すると深呼吸を終えた彼女はぼそりと「うしつ」と言つた後へラリとした。そのへラリとした顔が、とても可愛かつたんだ……。

一緒にかかるといいな・・・入学したら絶対見つけてメルアドを聞くんだと思つていた。

あれから2年・・・好きな子じゃなくて、全然なんとも思つてない子しか近寄つてこない。

1年生のときのオリエンテーリング、修学旅行、体育祭、文化祭・・・1、2年生はクラス替えをしないのに、何も有効な手立てが見つけられない俺つてヘタレ。

「はー、どうすりやいいんだか」俺は理系希望だから3年になつたら理系を選択する。岡崎さんは文系クラス志望らしい。つまり来年はクラスが別なので、今年は最後のチャンスなんだ。

昼飯を食べた後、校内にある芝生に通りかかったとき岡崎さんの声が聞こえた。・・・ショックだ。俺は彼女いわく「いかにもモテまつせ」顔で、好きじゃないらしい。化学の橋野じや、俺と全然違う。しかも、俺のこと「早川王子」って呼んでるし。

しかも、彼女とのきっかけになれば、と放課後に話をしたついでに告白したところ、表情が固まつたまま逃げられたし。もつとも、次の日には謝罪ついでに告白を断つてきた彼女を押し切つて強引にメルアドを交換した。なんともいえない表情の彼女を目の前にして、俺はとにかく自分の存在をアピールすることにした。

俺はさつそく彼女に初メールをした。メルアドを交換したので送つてみたことと、自分にも送つてくれるとうれしいという文面で送つた。ほどなくして、岡崎さんからメールがきた。

「メールあんまりしないので、時間があつたら送ります」・・・  
短い上に、そつけない。絵文字もない。なんとなく岡崎さんらしくて笑つてしまつた。

その1週間後、先生に頼まれて集めた課題を抱えて歩く岡崎さんに走つて追いついた俺は固辞する彼女を押し切つて課題を半分持つて職員室に向かつた。

課題を先生に届け終わり一人並んで廊下を歩く。うひひ、夢みた

いだ。

「早川くん、半分持つてくれてありがとう。一人で持つてくつてさつきは言つたけど、やつぱり重かつたから助かつたよ」

「どういたしまして。今度からああいつときは声かけてよ」

「んー。考え方とく」どうみても断る気満載の一コアンスで答える岡崎さん。

「とにかく、今日部活ない田だから一緒に帰らない? 岡崎さん」「いめんね。図書委員の当番でムリ。じゃーね、早川くん。あ! 唯ちゃーん」と川田さんを見つけた岡崎さんはそつちに走つていつてしまつた。

岡崎さんに声をかけられた川田さん、俺の姿を見つけると氣の毒そつな顔をして俺を見た。

な、なんの! 勝負はこれから。とりあえず「接点ない人」から「アドレス知つてるクラスメート」に昇格したのは間違いないし、返事はそつけないけどメールすればきちんと返信をくれる岡崎さんの丁寧さが俺は結構気に入つてゐるのだ。

## 第4章・早川　圭吾の翻訳・1（後書き）

読み「ありがとうございました。」

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

王子の「奮闘」が、皆様に伝わるとうれしいです。

王子、涼乃に翻弄されるの巻

今日は部活がないので、俺は放課後に図書室に行つてみると、話しかけるチャンスがあるかもしれないじゃないか。

図書室に入つてみると、そこは静かで落ち着いた空間だった。大きいテーブルが並べてあり、そこで課題を済ませたり読書をしたり、みんな思い思いに静かに過ごしている。

カウンターを見ると、司書の人だろうか、髪の毛をくるりとまとめてアップにしている人と岡崎さんが座っている。書棚に庚す本がある程度たまつたらしく岡崎さんが席をたち、ワゴンに本を並べ始めた。もしかして、話しかけるチャンス！！

「岡崎さん」後ろから声をかける。

「！？」とちよつとびくつとした彼女は振り返つて俺を見て「なんだ・・・早川くんか」と安堵していた。

「これから本を庚しに行くの？」

「そう。早川くんも手伝つて？なんてね」図書室は彼女のテリトリーなのか、いつもより俺と会話をしていくも気楽そうだ。

「いいよ。重そうな本もあるし、手伝うよ」

「えー、いいよ。そういうえば私、早川くんを図書館でみたことないや。本を借りるなら学生証が必要だよ。」

「そりなんだ。知らなかつた。」

「そりか。じゃあ今日覚えたね。よかつた。」と岡崎さんは笑う。

図書室に来たことがないということ、こんなに恥ずかしく思つたことが今まであつただろうか。いや、ない。

「これからちよくちよく来ようかな。だから岡崎さんの番の口を教えてくれると嬉しいな」

「部活さぼると、部長に怒られるよ。そうだ、来た記念に何か読んでいいたら？」で、それを“早川くんも感動”とか“早川くんも納得の面白さ”ってオススメ図書にしちゃうからさ

「それって、捏造じゃ……」

「本当に読んで感動したり、面白いと思えば捏造じゃないもーん。だから、何か読んで面白かったら教えてよ。藤村さんに言つて宣伝コーナーに入れちゃうからさ。藤村さんも、他の委員も喜ぶ」

「俺は、図書委員会の宣伝担当かよ」

「ふつ。橋野先生みたいなこと言つ~」・・・・・そりいえば、オススメ図書コーナーに“化学の橋野先生も感涙”とかコピーがついてる本があつたな。・・・・・いう仕組みだつたのか・・・・・どうせ家に帰つてもランニングしたあと勉強だけだし。息抜きに何か読んでいくかな。それに閉館までいれば一緒に帰れるかもしない・・・・。

「じゃあ、閉館まで本を読んでるから、俺と一緒に帰る~。その代わり読んだ本を宣伝コーナーに入れていいかからさ。どう?」

岡崎さんは一瞬固まつたが、ふつと笑つて「委員会活動に協力してくれる人を邪険にはできないな。いいよ、一緒に帰る~。ただし、駅までだよ。」やんわり釘をさすことを忘れない彼女は手ごわい。

「早川くんは、どんなジャンルが好きなの?」

「うーん。なんせ部活で帰つたあとに課題したりするのと暇くて。テレビもろくに見てない」

「じゃあ、前に見たドラマで好きだつたものとかあつた?」

「あ。あれ面白かったな。物理学者が事件を解決するドラマ」

「ああ~。あれはよかつたよね。主役の人の白衣&メガネ姿、たまらなかつたよ~。“実際に面白い”とか“意味がわからない”とか言われたいつてTVの前で思つてたもん。ストーリーも面白かつたし。でも最終回がいさか力技に走つてたのが残念だつたよ

・・・さすが岡崎さん。まずは白衣とメガネなのか。

「だったら、ドラマの原作を読んでみたりビリつかな。読みやすいからサクサクいけると思うよ。ちょっとドラマと違うところもあるけど、楽しめると想ひ。ちょっと返却されてきたから、ビリか。」と彼女は俺に本を差し出した。

「へえ。じゃあ・・・読んでみよつかな。学生証があれば借りられるんだよね」

「もうだよ。じゃあ、またあとでね」と彼女は返却ワゴンを押して行ってしまった。

はっ！俺、手ぬつつて言つてたはずなのに、つまづかわされたのか  
？？

読み「ありがと「ひ」や」といました。  
誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

涼乃が熱く語っていたドラマは、ピンと来た方もいらっしゃると思いますが、月のリオです。もともとイケメンでいい声のあなた方が、あんなに白衣にメガネ＆スーツが似合つなんてつ！！原作も読んだ上に、映画まで見に行つちゃつたじやないか！！

涼乃同様「意味が分からぬ」とか「実におもしろい」とか言われたいくつ思つていた作者なのでした。

- 3 (前書き)

王子、若干のステップアップに成功の巻

勧められた本は面白くて俺は結局読みきれなかつたので本を借りることにした。

「面白かったみたいだね。勧めてよかつたよ。・・・で、『ページをつけてもいい?』とキラキラした目で聞く岡崎さん。

「・・・いいよ」

「藤村さん、早川くんの〇〇でましたよ。」

すると、図書の人もやってきて「ほんとにー? よくやつた岡崎。早川くん、『早川くんも一気読み』って『ページで展示するから、』了承してね」

図書室の閉館を待つて、俺と岡崎さんは一緒に正門を出た。話をしていくつちに、二人とも最寄り駅が同じことが分かった。どうやら、俺は朝練で登校時間が早いため彼女と電車で会つことがなかつたようだ。

「俺と最寄駅が一緒だね。家は駅からどのくらい?」

「徒歩5分だよ。駅前にマンションができたでしょ? あそこなのは、俺の家のある出口の反対側出口付近に建つたばかりの高層マンションのことだらうか。」

「あの、駅前の高層マンション?」

「そうだよ。早川くんの家は駅からどのくらいあるの?」

「俺の家は、マンションと反対側の出口から歩いて10分くらいかな。」

「へへ。反対方向なんだね。」

ここで話が途切れる。俺はまだ岡崎さんと話がしたいので話題を考えてるけど、彼女はぼんやりと外を見ている。

「あのさ、来年、理系クラスと文系クラスに分かれるけど、早川さんはどちらを選択する予定?」

いきなりの話題に、岡崎さんはいたさか驚いたものの別に変と思わなかつたようだ。「文系かなあ。理系科目がちょっと苦手なんだよね。どうして数学や物理の問題を理系の人はあんなにすらすら解けるのかなあ。早川くんはどっちを選択するの?」

「理系クラスを希望してる。数学とか物理とか結構好きだし。」

「じゃあ、来年はクラスが別なんだね。」と岡崎さん。

岡崎さん・・・じうして来年はクラスが別とわかつて「ちょっとほつとした感」を漂わしてゐるのかなあ。

たぶん、岡崎さんの思ひ描くような感じにはならないこと思ひよ。前も伝えたけど、俺、あきらめ悪いから。

岡崎さんと話をしているうちに、最寄り駅に到着した。

「なんか、早川くんの印象変わつたよ。早川くんは外見が華やかだから、性格もそななのかなつて思つてたけど、とても真面目なんだね。」「めんね、今までちやらい人だと思つてたよ。」

岡崎さんは、悪いと思つたらちゃんと素直に謝罪できる女の子だ。やつぱり俺、岡崎さん、すきだなあ。偏見もたれてたのはショックだけど。

「誤解が解けてよかつたよ。といふでさ、俺も涼乃つて呼ぶから今度から俺のことを圭吾つて呼んでくれない?川田さんレベルの友達として」

「ええつ。それはいきなりハードル高いつすよ・・・」と怖氣づく岡崎さん。

「真面目な話もできる友達になれると思つよ、俺たち。」

「う・・・せめて圭吾くんにハードル下げてもうえないですかな。」

圭吾くん・・・それでもいいか。好きな子から呼ばれる自分の名前が、こんなに甘い響きだとは。

「じゃあ、今から圭吾くんで、よろしくね。涼乃

「ひ～・・・はや・・・けい」、くん・・・じや、じやあ私、出口  
こつけだから。じやあね、また明日」

「じやあね、涼乃。また明日」

俺は鼻歌を歌いたい気分で、家まで走って帰った。

どうやらマイペースな彼女に合わせて、長期計画で押していくた  
ほつがよさそうな気がする。

こんな感じで徐々に距離を縮めていたらしいな・・・俺は改め  
て決意したのだった。

### - 3 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

早川王子と涼乃の距離が少し近づいてきました。

第5章・平田 孝一郎の進展・1（前書き）

孝一郎、本格始動の巻

「おれはみずほとけつこんするーっ」

「えー、じゅいちらーはやだー。さくらぐみのひとしきんがいー」

・・・・なんで、幼稚園の頃の夢なんかみるんだ・・・・・

俺は、平田 孝一郎。隣の家には幼馴染の古川 瑞穂が住んでいる。瑞穂と初めて会ったのは、俺たちが4歳のときに遡る。俺の家の隣に古川さん一家が引っ越してきて、まず母親同士が意気投合して付き合いが始まったんだ。

古川さん夫妻は共働きで、瑞穂は一人っ子。俺の家は父親が勤務医で、母親は専業主婦で子供は俺と弟。母親は幼稚園へのお迎えなども「一人も一人も一緒よ。瑞穂ちゃんは、ばっちらり預かるからー！」と遠慮する古川さん夫妻を説得して瑞穂を預かったんだ。

女の子がほしかった母は、瑞穂をそりやあ可愛がった。俺はとうと、そういう境遇に別になんとも思わなかつた。俺も、瑞穂が可愛かつたのだ。ただし、俺の愛情表現は瑞穂の手のひらに力エルを乗せたり、靴に水をいれたり・・・とかなり歪んでいたが。

それで、夢で見たあの頃の思い出につながるわけだ。

今も、母は相変わらず瑞穂を可愛がつてゐる。

「できれば孝一郎と結婚して、近所に住んでくれるとうれしいんだけどー」

「孝一郎君は優秀だから、うちの瑞穂じや物足りないんじやない？あの子、ちょっとのんきだから」

「瑞穂ちゃんみたいな優しい子は孝一郎みたいな息子にもつたいないわよ。瑞穂ちゃん、お嫁に来てくれないかしらねー」

「たしかに孝一郎君なら瑞穂を安心して託すことができるんだけどねー」

両家の母親が楽しげにお茶を飲んで会話をしているのが聞こえる。

2階にいる俺に丸聞こえといふことは、どんだけ声でかいんだ。

失恋して泣いてるあいつに俺の長年の思いを告白したのが2週間前。それから瑞穂は俺を避けている。まつたく・・・・・。

ピンポーン。俺の家のインターホンがなつた。

しばらくすると、母親の声で「あら、瑞穂ちゃん。孝一郎なら2階よ。あがつてあがつて」

「いえ・・・母を呼びにきただけです。」

「あらー、孝一郎に用事じゃないの。残念」

「えつと・・・」俺は瑞穂の声がしてのうすけに1階へ降りていった。

「瑞穂」

声をかけられぎよつとした瑞穂。なんだか拳動不審だぞ・・・おまえ。

「あ、孝一郎いたんだ」

「いるわ。家で受験勉強だからな。瑞穂、勉強進んでるか?」

「う・・・うん。なんとか」

「息抜きでも行くか?」

「息抜き?」

「そう、これから外に出かけないか。お前何分でしたくできる?」

「えーつー!何それ。私、お母さん呼びにきただけなのにー」

「つべこべ言うな。何分で準備できる?」

「・・・・・15分」

「よし。15分後に迎えにいくから、準備しに帰れ」

「・・・・・うへへへ、分かったよ。じゃあね」押し切られた瑞穂は納得できない顔で戻つていった。

いつのまにか、母親が姿を消している。古川のおばさんの中にもしない。普通に茶のみ話をしてくれよ。

俺が2階に上がる前に母親たちから声がかかつた。

「デート?あんまり遅くなっちゃダメよ。あんたたち受験生なんだ

から「

「孝一郎君、瑞穂はあなたと比べて子供なの。その辺、よく考えてね?」

・・・・・」の人たちの中で、俺はいつたにじつにう風に認識されているんだろうか。

ともかく、瑞穂を外に連れ出して、避けてる理由を何としても聞き出してやる。

## 第5章・平田 孝一郎の進展・1（後書き）

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

「第3章：古川 瑞穂の再起」のその後になります。

孝一郎視点で書いてみました。

瑞穂に対しでは少し（？）強引な孝一郎です。

孝一郎は瑞穂が大切の巻

きつかり15分後、俺は瑞穂の家のインター ホンを鳴らした。瑞穂の応対する声がした。

「俺。準備できたか」

「うん。今開けるよ」瑞穂はドアを開けて外に出てきた。

「どこに行きたいといふはあるか」

「んー。特に・・・あ、噴水のある公園行きたい。天気いいし暖かいし。」

歩いて10分くらいのところに公園があつて、そこはちょっとした噴水や、たくさんのベンチがありちょっと散歩するのによいちょうどいい広さなのだ。

「そうだな。途中で飲み物でも買つて公園でのんびりするか」

ほんとは、ここで手でもつなぎたいといふんだけど・・・ここへ、動搖すると長引くからなあ・・・ムリか。

暖かいせいか、公園には結構人がいる。俺は「コーヒー、瑞穂は力 フュラテを買つてベンチの一つに座つた。

「図書委員の引継ぎ始めるのはいつだ」

「文化祭終わつてからかな。生徒会は？」

「会長が出るやつが全部終わつてからだから・・・いつも文化祭のあとだな。」

「文化祭か〜。」

「今年、どうするんだ?」

「調理部と合同でやつた読書カフェが好評だつたから、今年もやつてハセちゃんと話してゐるの」

ハセちゃんというのは、瑞穂の親友で調理部部長の長谷川 志保のことだ。のんびりした瑞穂に対して、しつかり&ちやつかり者の

長谷川が部活の予算委員会で希望額をもぎ取つていく手腕は豪腕の一言に尽きる。

「読書力FFHに今年も来てよね。で、面白いと思つた本を教えてちょつだい。『生徒会長も感動の1冊』とか言ってコーナーに飾るから」

「・・・最近、そのコーナーに『早川くんも一気読み』とかコーナーのついた本が置いてないか?」

「岡崎ちゃんが、見事に彼を口説き落としてねえ。おかげで、その本の貸出率がものすゞくって。」

その本を読んで面白かった人が他の本を借りていくパターンが出来上がつてね、活性化してゐるよ。と暢気に笑つてゐる瑞穂。

「岡崎ちゃんといえば、『瑞穂先輩は生徒会長のことを普通に名前で呼んで尊になつたりしないんですか?』って聞かれちゃつたよ。そういうえば、私たちお互に名前呼びだよね~」瑞穂はすっかり岡崎さんの相談役になつてゐるらしい。

「そうだな。でも、今さら苗字でよぶのも気味悪くないか?」

「そうだよね。何より、私と孝一郎じゃ尊にもならないよ」

「当たり前だ。俺が潰してきたからな。」

「はつ?」

「実際、1年ときにお前と俺がそういう尊になりかけたことがあつた。だけど、お前はそれを知つたら間違いなく、俺を避ける。尊というのは、逆をたどつていけば大元にたどり着くからな。あらゆる伝手で大元を見つけて、そいつをあからさまに潰しておいた。1年頃から生徒会にはいついてよかつたことの一つだな」

瑞穂を見ると驚いて声も出ないらしい。

「俺がそれだけのことをするつてのは瑞穂との関係を大事にしたいからだ・・・だから、どうしてこの2週間俺を避ける?理由を教え

る」

「・・・・・避けてなんかいないよ。孝一郎の『氣のせい』」  
「お前のやの“氣のせい”の言こ方は、『じまかすときの言こ方だよ

な。』

グッと詰まる瑞穂を見て、思わず笑いが出てしまひ。まつたく、  
何年瑞穂のそばにいたと思つてゐ? 可愛す。

## -2 (後書き)

読み「ありがとうございました」。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ものの言い方で、瑞穂がごまかしてるか分かる孝一郎つて、どんなだけ瑞穂溺愛なんでしょうか。

自分で書いててびっくり。

- 3 (前書き)

瑞穂、俺様に落ちるの巻

瑞穂はカフコラテを一口飲むと一息ついた。

「私、片思いだつたけど橋野先生が好きだつたの」

「うん」

「だけど、あの日、孝一郎が優しくて流されそうになつた」

「うん」

「でも、それは孝一郎に悪いと思つたから、ちゃんと考へようと思つた」

「うん、それで？」

「今までも孝一郎には彼女がたくさんいたけど、でもいつも孝一郎は私のそばにいた。だけど、いつかそうじゃなくなつたらどうしようつて思つたら、橋野先生に失恋したときより、すこく辛くなつたの。」

「そうか」

「うん。私、孝一郎とずっと一緒にいたい。……私、孝一郎が好きかもしれない」

好きかもしれないってなんだよ。自分の気持ちに自覚がないのか。告白にしか聞こえないのは俺の拡大解釈か？

「おまえ、俺のこと好きだろ」

「違うよ！――好きかもしれないって言つたでしょ！――」顔を赤くして否定するなよ・・・・

「ずっと一緒にいたいなんて、瑞穂・・・・そりやプロポーズか？」

「は？何言つてんのよ！」

「プロポーズは、俺が瑞穂にするから、先にするな

「はあつ？なんで、そこまで飛躍するの？？」

「まずはお互に希望の大学に合格しなくちゃな。俺、院にも行きたいから、その後就職して・・・・そうだな3年後くらいで瑞穂を養

えるようにならないとな。待つてねよ。」「

「待て？・・・・・どんだけ俺様。」

「今は・・・・・そุดだな。一緒に“いろいろ勉強”しなくちゃな」と一矢りとする俺。

「勉強・・・・・そุดだね、受験勉強しなくちゃ。」お、いつのには引っからなくなつたのか。

いつの間にか、夕方になり少し肌寒くなつてきた。

俺たちは公園から家に戻ることにした。めでたく「恋人同士」に进展したらしいので、俺は瑞穂と手をつないでみた。

瑞穂と手をつなぐなんて、どれくらいぶりだろ？俺の手も背も大きくなつて、瑞穂の手だつて子供から大人の女性の手に変わりつある。

「ちょっと！なんでいきなり手をつなぐのよ。恥ずかしいじゃないの！」手を振り払おうとしてるから強く握つて逃がさないようにした。

「彼氏と手をつなぐ彼女だぞ。ほほえましいじゃないか

「それ自分で言つ？？ねえっ！」

手をつなぐだけで、この狼狽ぶり。腕をからめたり、その先へ行くたびにどれくらい瑞穂は狼狽しまくるんだろう。なんだか楽しくなつてきた。

「瑞穂の初めでは、みーんな俺がもううからな。今まで彼氏いなかつたのは知つてるし、これからも俺以外いないから

「な、なななな・・・・・」

「なんだ、ナスでも食べたいのか

「なんてこと、言つのよ！？」

「誰も聞いてないよ。大声出すと立つぞ」

あーあ、ここでキスでもしたいけど、したら確実に口を利いてくれなくなる。

ま、これから先いくらでも機会はあるからな。まずは変化した二人の関係を楽しむか。

「お前、夏休みはどうすんの？」

「えへへ、学校の補習授業と夏期講習つける。」

「そうか。俺もそれに付き合う」

「あんた・・・」「大確實って聞いてるけど」

「講習のあとにテーーーして息抜きすんの。な、瑞穂？」

「・・・わかった。」

瑞穂は、どう脳内解釈をしたのか「孝一郎はレベルが高いから、一緒に勉強すると成果がありそうだね。」とボケた発言をかました。

### - 3 (後書き)

読み「ありがとうございました。」

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

瑞穂＆孝一郎がメインの話は、これで終わりです。

第6章は久々（第1章「困惑」いろいろです）の涼乃視点になります。

第6章・岡崎 涼乃の心持 -1 (前書き)

涼乃、モヤモヤするの巻

早川王子からの強引な提案「お互に名前を呼ばづ」からずつと私は王子から「涼乃」と呼ばれ続けている。王子は、私が「早川くん」と呼んでも返事をせずに「圭吾くん」と呼ぶと返事をする。

制服が冬服から夏服へ変わる今、「涼乃・・・すっかり“早川くんが唯一名前で呼ぶ女子”認定されちゃったよね」と唯ちゃんが言うくらい、私はクラスで“早川くんの特別”扱いとなつていて。瑞穂先輩に至つては、「岡崎ちゃん、早川王子はクモで岡崎ちゃんは餌の蝶にしか見えないよ。わたし・・・」と肩をたたいてくれつたつけ。

そんな古川先輩はいつの間にか生徒会長の平田先輩と付き合つようになり「付き合つてているけど、幼馴染の頃と変わらない」と先輩は強調している。でも、先輩の当番の日には必ず会長が来て、終わるまで待つて一緒に帰つていく様はラブラブカップルにしか見えない・・・と藤村さんプラス委員たちの間で見解が一致している。

前に「（俺のことを）よく分かるようになつたら、考え方直してくれる？」って告白を断つたら言われたけど、確かにあのときより、早川くんの人となりが分かつてきただけど・・・だからといって、付き合つのとは違う気がするんだよなあ・・・放課後当番で人がまばらなのをいいことに私はほんやり考えていた。

と、そこに早川くんが現れた。といつても彼は一人じゃなくて女子と一緒に。

つやつやの茶髪をくるんと巻いて、女子高生に見えない大人っぽさ。足は長いし、すらりとしているし、顔もまつげはくるくる、唇はつやつやの美人さん。うーむ。私とえらい違いだ。

「涼乃先輩」と隣に居る一年の委員、武内 苑子ちゃん（あだな：そのぽん）が、声を潜めて話しかけてきた。

「どしたの、そのぽん」

「早川先輩の隣にいる、あの子同じクラスの桜井さんです。」

「へえー、桜井さんつていうんだ」

「彼女、早川先輩を狙つてるらしいんです。涼乃先輩のことも知つてて、絶対私のほうが早川先輩に似合つて言つてるのを偶然聞いてしまつたんです。私、先輩に言つたほうがいいのか迷つて……言えなくてすみません。」

「そのぽん、心配してくれてありがとね。でも、私と早川王子は恋人同士じゃないから。桜井さんも、そんなムキにならなくてもいいのに」

でも、なぜか心がモヤモヤする……。

私たちの声が聞こえたらしく藤村さんも「なになに？」と混ざつてきた。

そのぽんが同じ説明をすると藤村さんも「ほ～自信家だねえ」と桜井さんのほうを見る。桜井さんは早川くんにずっと何か話しかけているようだ。

見たくないな。彼女じゃないせに早川くんに「何やつてんのよ」つて怒つてしまつそうだ。

藤村さんは、私の様子をみて「岡崎。ちよつと書庫の整理してくれない?」レジに目録あるからや と10枚程度の目録一覧を持つてきた。

「岡崎、とりあえず書庫に引っ込んでなさい」肩をたたかれ、私はうなずく。

「先輩。桜井さんとは偶然一緒になつたかもしませんしつ。カウンターは私だけでも今日は大丈夫ですか？」

自分の発言で、私が落ち込んだと思っているそのぽんは、責任を感じているらしく。

「・・・書庫行つて来まーす」私は周囲に声をかけて地下の書庫に下降りて行つた。

書庫はひんやりしていて、本に適切な温度で年中保たれている。実は私は図書委員のいろいろな作業のなかでも書庫の整理はトップ3に入るくらい好きだ。

私は早川くんのことを忘れて作業に没頭していった。

## 第6章・岡崎 涼乃の心持 -1（後書き）

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第6章は久々の涼乃視点です。

王子、涼乃のサササタニトトトの巻。

いつの間にか閉館時間になつたらしく藤村さんが呼びに来るまで、私は書庫の整理に没頭していた。

「岡崎。閉館時間よ。」

「はい。すみません、1／4くらいしかできませんでした。」

「それだけできれば上出来よ。あとは重そうのがあるから、橋野先生がヒマな時間に合わせて委員みんなで整理しましょ。」

私は、橋野先生と聞いて、どうしても聞いたかったことがあるので藤村さんに聞いてみた。

「藤村さん

「はい?」

「橋野先生と付き合つてほんとうですか?」

「は・・・? (ゴン) うお～～～いてえ～～」藤村さんはどうやら箱に足の小指をぶつけたらしい。

「藤村さん、動搖しそぎ・・・・・」

「え、なんで? どうして?」

「図書委員は全員知つてます」

「どこで見られたんだか・・・・・」

「お似合いだと思います」

「生徒にそういうことを言われる日がくるとは・・・・・なーんか年取つた気分・・・でも、内緒にしてね?」

「大丈夫です。図書委員はみんな口堅いです」

「それは・・・ありがとね。」赤くなつたり青くなつたりした藤村さんは、失礼だけどとてもかわいかった。

施錠した藤村さんと別れて私は正門へと急ぐ。早川くんは桜井さんと帰つたのかなあ・・・・そう思つと、私は足取りが重い。

「涼乃」と前から走つてくるのは、早川くんだ。おや? 一人だよ。

「圭吾くん……あれ、帰ったんじゃなかつたの？」

「涼乃と帰る「う」と思つて待つてた。今日は、途中でカウンターからいなくなつてたよね。どうしたの？」

「藤村さんに頼まれて、書庫の整理をしてたの。つい没頭しちゃつて……待たせたのなら『ごめんね』」

「そんな待つてないから、大丈夫。そういえば、今日は司書の藤村さんとカウンターにいた1年生の視線が冷たかつたんだけど……なんでかな」

「……藤村さん＆そのぼん……あからさまな扱いをしそぎ……私は「さあ、わかんないや」と知らないふりをした。

「……とこりで、わつわから早川くんから甘つたるい香りがする。……面白くない。」

「なんか早川くんから、甘い匂いがするね。」

とたんに早川くんが、眉をひそめる。王子は眉をひそめようが、唇とがりせようが（今はとがらせてないけど）イケメンだな。

「今日、図書室に向かってこるときに、女の子がいきなり現れたんだよ。」

自分に自信があるんだろうな、どうやら俺と涼乃の事を知つているけど“あきらめませんから”って言われちゃつたよ。俺としてはあきらめてほしい

どうやら、桜井さんとやらは、なかなかきつつい人物のようだ。あとで、そのぼんに聞いてみよ。

その前に、早川くん……私と早川くんの間には「友達」しかありませんが。

「桜井さんって、すごいね」と私は思わず彼女の名前を出してしまつ。

「涼乃、なんで名前知ってるの？」

「え、えーと。ちょうど圭吾くんが来たときに私もカウンターにい

たので・・・一緒にカウンターにいた武内さんと同じクラスらしくて。私と違うなーと思ってみてた。」

「でも、俺がカウンターに行つたときは、いなかつたよね」「あのあと、すぐに藤村さんから書庫整理を頼まれたから見てたなら、助けてくれてもよかつたのに」

「えー。だつてなんかモヤモヤしちゃって」

「モヤモヤ? 涼乃があの光景を見てモヤモヤしたの?」早川くんが、こつちを見て不思議そうな顔をしたあと、ちょっと嬉しそうな顔になつた。

「・・・私、今、何言つた・・・?」一人を見てモヤモヤ そのあとすぐに閉館まで書庫整理 早川くんから香る甘つたるい匂いが面白くない・・・私、焼きもち?...ひそーつ!

「そつかー、涼乃やきもち焼いてくれたんだー。うわー、ここまで長かつたなあ~」

たちまち上機嫌になる早川くん。

「ちがうよつ! ちょっと氣になつただけ!!!」

自分の失言を取り繕つことに必死の私。

私は瑞穂先輩の“早川王子はクモで岡崎ちゃんは餌の蝶”といつ言葉を思い出していた・・・。

## - 2 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第6章はこれで終わりです。涼乃の気持ちに若干の変化が現れ始めました。

第7章は大人の二人です。

ちょっとだけR15風味が登場です。

せつかくR15つけたので、生かさないと。

藤村、恋人トークに自爆の巻

私の彼は泰斗高校で教師をしている。私は同じ高校の図書室で図書として働いている。

「職場恋愛」の私たちは、付き合っていることを誰にも内緒にしてきた・・・はずなんだけど、なぜか図書委員の子達にはばれいたらしく、委員の一人で2年生の岡崎 涼乃から「お似合いだと思います」などと言われてしまつた。

彼、橋野 誠介に、そのことを話すと「うわ〜、まいったねえ」などと全然まいつてない口調で言つただけ。恥ずかしいのは私だけなのかよつ！と思わず突つ込みを入れたくなつたけど、ここは我慢だ。「誠介の口調は、全然まいつてないね。私は岡崎から言われて「顔から火が出る」つてこういうときに使うのかつて思つたよ」と思い出してまた赤くなつてしまつ。

誠介はちょっと考えて「知られているのは図書委員だけなんだろう？まあ、もしかしたら古川さん経由で平田くんが知つてるかもしれないけどさ。それに僕は、ばれても全然かまわないよ。恵理子はばれるのは嫌？」

「嫌じやないよ。ただ・・・恥ずかしいだけ」

「それなら一人で堂々としてればいい」と誠介は私の手を握つた。

期末テストが来週から始まるせいか、図書室で勉強している生徒の姿が目立つ。

早川くんと友達らしい男の子が、岡崎と彼女の友達、調理部の川田さんが勉強中の隣の席について「4人で勉強しようよ」と言つているのが聞こえてしまつた。・・・早川くん、図書室ではもうすこし静かにしようね。

どうやら岡崎に怒られたらしい、シュンとしていた早川くんは、

申し訳ないけど犬がうなだれてるみたいで、かわいい。王子なのに犬キヤラ。

別の机では平田くんと古川が勉強していた。学年トップの平田くんが、どうやら古川に勉強を教えていた。ううだ。

別の日にも図書委員の子を何人も見かけた。……テスト、頑張つてほしいものだ。

夜に部屋でくつろいでいると、『テスト期間が終わるまで、忙しくて会えない。ごめん』とメールが来た。

『分かってる。無理して体調崩さないようにね』と返信してみた。すると、忙しいはずの誠介から電話がかかってきた。

「どうしたの？ 今どこ？」

「学校……規則でデータを学校から持ち帰れないからね

「でも、もう21時過ぎてる……」

「大丈夫。もう少しで完成だから。……これが終われば、少し楽になる。」

「そつか。あまりムリしないでね？」

「あーあ、全然恵理子にさわれてない。」

「なんてことを学校で言うのよ

「僕しかいられないから、いいんだ」

「テストがあけたら、たっぷりさせせて？」

「誠介……切るよ

「ごめん。でも、テストが終わるまで会えないのは寂しいよ

「私もだよ。ね、テスト終わったら、休みの日にどこかへ出かけよう？」

「うーん、そうだね。じゃ、そろそろ切るよ。おやすみ

「おやすみ」

うーん、まさに恋入トーク……私はなんだか恥ずかしくなつて「ひやー」と一人で悶絶してしまった。私、何やつてんだか。

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第2章：橋野 誠介の忍耐の続編です。

次、R15登場の予定です。

た、たぶんR15くらいだと思います。

- 2 (前書き)

がつつく橋野の巻  
R 15 です。

期末テストが終わり、その週の土曜日に会つて、そのまま誠介の部屋に泊まつた。

私の体に絡まつてゐる彼の手も足も、結局外れることなく一人は眠つてしまつたらしい。

顔だけ彼のほうに向けると、どうやら起きる気配はなさそうだ。

「これは外れないわね。どうしようつ」顔を違う方向に向ける。

田に入つたのは、散らばる衣服・・・久しぶりだつたせいが、誠介にむさぼられた感じ。

付き合つようになつて3ヶ月。一緒に寝るようになつたのは付き合つてからわりとすぐだつた。

「うーん、それにしてもほぞけない」ちょっとともぞもぞしてみるけど、は全然動かない。

「まだ起きる時間じやないよ」と耳元に声と歯が触れてきた。

「ひやつ・・・なんだ、起きてたの?」

「なんか、もぞもぞしてるから・・・田が覚めた

「今、何時じろかなあ」

「さあね。今日も休みなんだから別に気にしなくていいんじゃないの?それに・・・」

誠介はニヤリと笑つて、私の体をさらにきつく抱きしめる。

「・・・・まだ、足りない。」とさらに耳元でささやく誠介。

そして体が自由になつたなーと思つたら、今度は誠介が上から私を見る。

「ベッドから出ようなんて、思わないよね?」

ほんとーは、お風呂とかに入りたいです。でも、こうなつたら誠介は絶対に離してくれない。

誠介はうれしさうに、首筋からどんどん下へ唇を移動していく。手は私の体のあちこちをさわってる。その手はいつものように私の弱いところを的確になぞつてくる。

私はそれが気持ちよくて思わず声が出てしまう。すると誠介はますますうれしそうに、私の体のあちこちをさわる。誠介の唇が再び、私の顔に戻ってきて深くて長いキスをしてくれる。

それが合図で、私たちは、深くつながつていいく。

一人でそのままベッドでまどろむ。

「そろそろ、お風呂入らうか。恵理子、入るだら?」誠介が起き上がり浴室のスイッチを押す。

「うん。・・・・今、何時?」と私も起き上がる。

「10時。一緒にに入る? 恵理子」

「誠介と一緒にいると、いつも恥ずかしいことあるからやだよ」「それを言つなら気持ちよく、じゃないの?」ヒーヤーヤする誠介。「誠介はがつつくのね」

「そうだよ。恵理子限定でね」

そこでギュッと抱きしめられたら、もう動けない。

## - 2 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

R-15のつわり・・・なんですね、楽しめましたでしょうか。

- 3 (前書き)

なんだかんだで甘い週末の巻

お風呂から出で、私は誠介の部屋においてある服に着替えて軽くメイクもする。

お互の部屋に、それぞれ相手が自分の服や小物を置いていく行為は、まるで部屋を侵食しあつていくみたいだ。

「冷蔵庫見てもいい？何か適当に作るよ」

「いいけど・・・何かあつたかなあ。この2週間、期末テストの問題つくつたり会議あつたりで外食続きで家で食べてないんだよなあ」

私は冷蔵庫を開ける。

見事に何もない。ハイボール缶一つ（誠介は飲めないので、きっと私用である）、バナナ（誠介の朝ごはんその1）食パン（朝ごはんその2）、卵2個。それと、野菜ジュース、お茶、ポット型浄水器。

「野菜がないねえ」

「最近、買い物も行つてないからなあ」

「買い物して、何か作つて食べない？」

「そうだね。買い物に行こうか。」

パスタを食べようといつ話になつて、野菜やパスタ、それぞれの好みのソース、他の食料品を購入し帰路につく。家でパスタを食べつつ、誠介のこのところの忙しさの話を聞いていた。

「すごいハーデスケジューるで驚いてしまつ。

「一段落ついてよかつたね」

「やつと恵理子と過ごせるわけだよ。もう長かつた・・・」

そんな誠介が、なんだかとても可愛くみえて思わず髪の毛をなで

てしまつ。

「僕は子供か？」

「うふふ。なんだかわつきの発言がかわいかったの」

「ふーん。じゃあ・・・・・」と私の手をとり、なぞる誠介。

誠介の考えが察した私は「だめ。私、家に帰りたいの。明日は学校でしょ。」とやんわり拒否をした。

すると誠介は「じゃあ、僕がスーツとか必要なものを持つていくから今日は恵理子の部屋に行くよ。明日は一緒に出勤しよ」と言いい出し、私の部屋にいくことになってしまった。

そして、私はまた誠介に食べられてしまつたのである。

・・・・・ 月曜日。なんとか誰にも見られずに学校へ来ることができた・・・よかつた。

### - 3 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

誠介＆恵理子メインの話はこれで終わりです。

第8章は早川圭吾の奮闘パート2です。

王子は欲張りの巻

1学期の期末テストも終わり、夏休みが近い。

来年は受験だから、今年から勉強に本腰をいれないと・・・とは思っているけど、なんとか涼乃との距離を「友達　彼女」に縮めたいよなあ～とも思つ。

最初は、俺が涼乃を名前呼びしたことでクラスでちょっとした騒ぎになつた。現在はもう周囲も慣れ、涼乃が淡々としているせいか誰も何も言わなくなつた。

涼乃はメールだけじゃなく、最近は教室でも気軽に話をしてくれようになつたので、大きな進歩なんだけど・・・俺は欲張りだから、それ以上がほしい。

今日は、涼乃と一緒に帰れる日なので夏休みのスケジュールを聞いてみることにした。

「涼乃は、夏休みってどんな予定になつてるの？」

「学校の来年の対策授業受けて、唯ちゃんや他の友達と遊んで、あとは母の店の手伝い。手伝うと8月のお小遣い3倍にしてくれるっていうからさ。夏から秋はいろいろ入用だから、稼がないと。」

・・・・ん？母の店？

「涼乃のお母さんは、何かお店を経営しているの？」

「あれ？言つてなかつたつけ。私の家、駅前のマンションにあるつて言つたでしょ。あそこの一階で母がカフェを経営しているの」

「え。そうなの？」

「そうなの。ヒマがあつたら、ぜひ来てね。とにかく、早川くんの夏休みはどんな予定なの？」

「テニス部の合宿と練習・・・あのさ、練習ない日に一人でどこか行かない？」

「一人で？」

「うん。友達だと一人で出かけたりするのは普通でしょ」  
涼乃は、俺の発言に微妙な顔をしていたが、「いいよ」とわりと  
あっさり了承した。

よしひ！…よくやつた俺！…涼乃と一人でお出かけ、よしひ！…

次の日から、俺は部活と勉強しかなかつた夏休みが、涼乃とテー  
トの予定が入つたことでがぜん楽しみになつてきた。

部活の帰りにも仲間から「早川。なんか、いいことあつたのか？」  
と勘ぐられるほどテニスも調子いいし、何より気分が最高潮。

「ん？別になにもねーよ」と言いつつも顔が笑つてしまつ俺。  
「なんだ、例の岡崎さんと、いいことあつたのか？」と聞いてくる  
奴もいるが、無視だ無視。

教師から出される大量の課題にげんなりしつつも、俺の心は雲ひ  
とつない快晴の空のようになつてしまつっていた。

## 第8章・早川 圭吾の奮闘2・1（後書き）

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第8章は早川 圭吾の奮闘第2弾です。  
じれつたい一人です・・・。じらしている作者がいつのもなんですが。

さて、映画に集中できるの巻

夏休み、今日は涼乃と会う日だ。

最寄り駅に到着したのは5分前。涼乃は既に待っていた。

ふんわりした紺色のブラウスにロールアップしたカーキ色のパンツをはいた涼乃は、ちょっと大きめのバッグを肩からさげて、文庫本を読んで俺を待っていた。

「じめん、遅れた」

「そんなことない。私が早く到着したんだよ。」

「じゃ、じゃあ、行こうか。映画は何か見たいのある?」

「いちおう、パソコンでこれから行くところのスケジュールをプリントアウトしてきたよ」と、涼乃は俺に紙を渡す。

でも、題名だけ見てもさっぱり見当がつかないな。うーん、どうしよう・・・と考えていたら、涼乃が「私ね、いちおうスケジュールはプリントアウトしたもの、内容見てこなかったの。バカだよね~。だから、圭吾くんがよければ、実際に行つてプログラムをもらつてから決めない?」とテヘヘと笑つた。

「いいよ。実は俺も内容がさっぱり分からなかつたから涼乃が提案してくれてよかつた」と俺も彼女の笑顔に釣られて笑つた。

お昼を食べた後、映画館で検討した結果ハリウッド系アクション物にしてみた。

映画が始まつたけど、隣に涼乃がいると思つと画面に集中するのが難しい。シートにちょっともたれて姿勢を変えたりとかそういうのが伝わってくると、どきどきする。

女の子と映画を見に行くなんて初めてじゃないのに、ビ�しちやつたんだろ、俺。

そういえば、涼乃は夏休みの課題終わったのかなあ・・・など

と俺は映画と関係ないことをぼんやり思っていた。

映画はちゃんと目では追っていたんだけど、ストーリーがよく分からないまま終わってしまった。

「映画、結構おもしろかったね～。圭吾くんは、どうだった？」

「なかなかの迫力があったね。車を使ったアクションとか「涼乃が気になつてあまり見てませんでしたなんて言えないの、確かにそういう場面があつたよな、と思って口にする。

「あ～、確かに。すごかつたよねえ！あと私、主役のマツチヨな捜査官よりも相棒の博士に目がいつちゃつたよ。熱くなりがちな主人公に対してコンピューターの天才で冷静な彼！！いいよねえ」

「そういえば、そんなキャラクターいたなあ。・・・確かに白衣にメガネだったよな・・・」

「涼乃好みの白衣メガネだったね」

「そうだね～。外見もだけど、キャラクターがツボだったよ。彼はなんという名前なんだろう。帰つたら調べてみよ」なんだかうれしそうな涼乃。

なんか面白くないなあ。俺が涼乃に気を取られてる間、彼女はしつかり映画を楽しんでる。

「あのさ、涼乃」

「はい？」

「俺、今日デートのつもりだったんだけど・・・」

涼乃はそれを聞いて顔が赤くなつた。「そ、そつか。えと・・・」  
「そうだよね、デートだよね。」

二人の間に、沈黙の時間が流れた。

恥ずかしくなつた俺は、急遽話題を切り替えた。

「あ！ そうだ、涼乃は夏休みの課題どこまで終わつた？」

「数学と物理のテキスト以外はメドがついた・・・でも一番苦手

なものを残しちゃったよ。」と涼乃はげんなりした顔をした。

俺はチャンスと思って、「あ、じゃあ。今度、図書館で待ち合せして一緒に勉強しない?」

「へっ。でも、圭吾くん部活は?」

「8月になつたらテニス部は午前中だけになるから午後はあいてるよ。都合がよければ、どうかな」

「えつと・・・・・」

「俺、数学と物理のテキストはメドがついたんだけど、古文と英語が全然だめなんだ。涼乃に文系の科目を教えてもらえると助かる。俺が涼乃に数学と物理を教える代わりにどうかな」

涼乃には、交換条件を持ちかけるとわりとOKが出ることが多い。どうやら彼女は、無条件で人に「してもいい」ことが苦手みたいだ。

「・・・お互い、助け合つてこと?」

「そうそう。」

ひつして、涼乃と一緒に図書館で課題をすることが決定した。

## - 2 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

王子の奮闘第2弾。

涼乃は映画をしつかり楽しんでいた模様。

次回は第9章で涼乃視点です。

第9章・岡崎 涼乃の一歩・1（前書き）

体たらく涼乃の巻

なぜか早川くんと一緒に課題をするめになってしまった。

映画も、彼に「デートのつもりだったんだけど」と言われて初めて“おお～、この状況はデートか”と気づいた私に、やっぱり早川くんの相手というのはハードルが高すぎる。

それにしても私みたいな“デート初心者”にも彼は優しかった。さすがだ。

ただ、映画だけで終わるはずが、なぜか課題も一緒にやる約束をしてしまったのは自分でもびっくりだ。どうしちゃった、私。

図書館までは同じ市内でも距離があるので自転車で行くことに決めた。早川くんも自転車だというので、一度駅のロータリーで待ち合わせをして一人で行くことにする。

早川くんが「涼乃を後ろに乗せたかったな」と言つたけど・・・  
一人乗りは違反だよ、早川くん。

図書館につき、座席をキープしテキストをひろげる。私たちは黙々とテキストを埋めていき、ときどき分からぬところを教えあう。勉強の最中、ふと見る彼の勉強姿は、眼福の部類だらう。同じようく勉強している女の子たちも、たまに彼を見てる。

そして、私をみてちょっと「ふつ」って笑うんだよなあ。気持ちは分かる。

「どしたの？どこか分からないところでも？」私の視線に気づいた早川くんがこっちをみた。

「ん？あ、何でもないつ。そろそろ一日休憩しようかな～って思つただけ。」

時計をみると、勉強を始めて1時間30分くらいたつている。

「そうだね。そろそろ休憩しようか。どこか一息つけるのかな。」

「あ、休憩室に自販があるよ。ベンチもあるから、そこで休憩しな

い？」

「いいね。そうじょう「私たちは財布だけもって、席を立つた。

休憩室はタイミングがずれたみたいで、誰もいなかつた。

「圭吾くんは何を飲む？」

「俺は、コーヒー。涼乃は？」

「私はお茶」

それぞれ飲み物を購入して、ベンチに座る。

「涼乃、進み具合はどう？」

「圭吾くんのおかげで、順調だよ。どうもありがとう。圭吾くんは

？」

「俺も。おかげでサクサクと進んでる。助かったよ。」

「もう少し勉強したら、何か食べて帰らないか？小腹が減っちゃつ

て」

「うん。いいよ。頭使つとお腹すべくな~」

「お~、すくよな」

「私たちは、のんびり休憩したのだった。」

## 第9章・岡崎 涼乃の一步・1（後書き）

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第9章は涼乃視点です。

王子と涼乃の間を一区切りさせる予定です。

鈍感涼乃の巻

課題を予定通りに終わらせて、小腹のへつた私たちはセルフ「うどん店」に入つてうどんを食べていた。早川くんはてんぷらと稻荷とおむすびも食べてる・・・いつたい、あのスマートな体のどこに入るんだろうか。

「圭吾くんのおかげで、一人でうんうん唸つて考え込むよりずっとスマーズに進められたよ。どうもありがとう」

「俺のほうこそ。やつぱり苦手な科目つて一人だとやる気でないし、涼乃と一緒にできてよかつた。」

早川くんつて、いい人だよなあ・・・私はつぐづく思った。私のどこがいいんだか告白までしてくれた奇特な人だ。それにメールのやりとりや実際に話してみると、普通に楽しい。

課題を一緒にしてから3日後。私は午前中に母の店を手伝つたあとに唯ちゃんと遊ぶ約束をしていたので、唯ちゃんに早川くんとの映画や勉強会の話をした。

一瞬驚いた唯ちゃんは「涼乃、あんた早川のことどう思つてる?」と真面目な顔をして聞いてきた。

どう思つてるかって・・・うーん。「早川くん? 最初キャラそうつて思つたけど、話してみると結構いい人だよね」と素直に答える。「いいひと、ねえ・・・。そついえば早川にまとわりついてる1年の女の子いたよね。」

「桜井さん?」

「そう。涼乃は、早川と桜井さんの一人を見たとき、どう思つたの?」

「・・・うーん、もやもやした。なんていうか、面白くなかった」

唯ちゃんは一ヤリとして、「涼乃、それは嫉妬だね?」と面白うだ。

「うひひ。認めたくない・・・自分が焼きもちを焼くなんて」と私はうなだれた。

『いつも淡々とマイペースに』とこうのを心がけているのに、私もいつも早川くんに振り回されてる。

「涼乃、認めちゃえば〜?」

「なにを?」

「涼乃はね、早川くんのことを好きになりかけてるのよ。そつかあ。親友に彼氏が出来る日が来たのね〜。しかも早川王子かあ〜」

なぜかうなずきながら、一人で納得している唯ちゃん。

「好きに・・・なりかけ・・・」えつ。そつなかな・・・ひよえ〜。そつなかな。

私、・・・早川くんのこと、好き?

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

涼乃がようやく、自分の気持ちに気づいてびっくり。

自覚する涼乃の巻

第三者に言われて自分の気持ちが明確になることがある。

唯ちゃんに「涼乃はね、早川くんのことを好きになりかけてるのよ。」と言われたときの私は、まさにその状態で。

「同じクラスでも知らない人」のときだつた早川くんは、女の子同士の揉め事を誘発させるチャラい奴つてイメージだつた。だから、最初に告白されたときは、ひたすら驚きと困惑しかなかつた。その後、断りきれずにメル友となつて言葉も交わすようになつてから早川くんの印象はだいぶ私の中で変わつてきた。

早川くんつて、いい人なのに整いすぎた外見で知らないうちに偏見もたれるタイプなんだなあ、というのが今の私の認識だ。

話してみると、早川くんは外見こそ「王子」だけど中身は「普通の男の子」で、しかも眞面目で他人に対して気遣いのできる人だつた。

どうやら、いつの間にか瑞穂先輩いうところの「クモの餌」になつてしまつたみたいだ。

私、今、早川くんにちゃんと返事をしないといけないつて思った。

ふとカレンダーを見ると、明日は来年の対策授業がある日だ。テニス部は部活があるのかな。

最近のメール履歴で一番多い早川くんのアドレスに私は「明日、私は学校で対策授業を受ける予定だけど、早川くんは部活?」と送つてみた。

すると、すぐメールではなくて電話がかかってきた。

出ると第一声が「なんで“早川くん”に戻つちゃつたの」という早川くんの不満そうな声だつた。

「・・・うつかり入力しただけだよ。」早川くん、見逃さない人だ・・・。

「涼乃、明日学校来るんだ。俺は明日部活あるし……授業は午前中?」

「そう。確かテニス部は8月入ると午前中だけだって言つてたよね」

「……朝7時から毎までだね。」

「……は〜〜大変だね」

「で、どうしたの」

「うん、あのね……」「……で、用件を言おうとしたところ、早川

くんは私の口調で察したらしく

「もしかして、返事?」

「う、うん。私、考えたの。で、あのね……」と言いかけたところ

「待つた」と早川くんからストップがかかつた。

「え、なんで。」別に今返事をするわけじゃないんだけどな。

「明日、授業が終わつたら正門で待つてくれる?一緒に帰りうる。

・あ、でも暑いから日陰がいいか……どこがいいかな

「じゃあ……明日は確か図書室の開放日だから、先に着いたら中で待つてくれる?私も中で待つてるから

### - 3 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第9章はあと一回で終了予定です。

閑話をはさみ、新たな視点となる人物が登場する予定です。

涼乃、新たなプレッシャーがかかるの巻

対策授業を終えて、私は図書室に急いだ。

図書室に到着したとき、ちょいちょい反対側から早川くんが歩いてくるのが見えた。

私たちは、そのまま一人で帰ることにした。

雑談をしながらの帰り道、どうやつて切り出せばいいのかなあ・・・

「ちょっと寄っていく?」と私を誘つた。

お昼が近いせいか、公園に人影はない。私たちは日陰のベンチに腰掛けた。

「涼乃」

「ん?」

「返事を聞く前に、俺から聞いていい?」早川くんは私を見た。

「なにを?」私も、思わず緊張してしまつ。

「涼乃は、俺の印象つて“よく知らない人”から変わつた?」

「うん。変わつたよ。早川くんは親切だし、話してると楽しいよ」

「あのせ、俺は今でも前と気持ちは同じだよ?涼乃のこと好きだし、彼女として付き合つてほしいって思つてる」

早川くんは真面目な顔をして私を見る。私も返事をしなくちゃ・・・

・・・。

「あ、あのね。わ、私、私も・・・圭吾くんのこと、すきだから・・・

・ その・・・」

そのときの私は顔が真っ赤だったに違いない。でも早川くんも、同じくらい赤くなつていた。

「ほんとに?俺の彼女になつてくれる?」

「うん・・・「地味で平和な高校生活」には程遠そつだけど、それでも早川くんと一緒にいると楽しいから・・・」

「俺、涼乃のこと守るから。『地味で平和な高校生活』は俺だつて望んでることだから。・・・ありがと、涼乃。これからよろしく・・・

・ぷつ・・・なんか俺、気が抜けちゃつたよ。」

「「」こちらこそお願いします・・・ぷつ・・・私も気が抜けた。」

緊張がほぐれたのか、思わず一人で笑つてしまつた。

「帰らうか。腹へつたな。何か食べて帰らうか」

ベンチから立ち上がつた早川くんが私に手を差し出す

「うん」と私は席を立つ。

「涼乃、手」と早川くんは私に手を出すよつて促す。

「？」私は何も考えずに手を出した。

すると、早川くんはいきなり手をつないできた。

「えつ・・・」ヒビックリする私に、早川くんは「だつて、涼乃は俺の彼女だもん。手をつながなくちゃね」とせりりと言つてのける。いきなり、手すか！さつき、お付き合にしましょつてこつたばつかじやんかつ！

「それと」と早川くんはさらに続けた。

「圭吾くんも、よかつたけど・・・俺の「」と、呼び捨てで呼べるようにしてね」

圭吾くんと呼ぶだけで、私のHPは確実にプレッシャーで消耗してこるとこつて、せりに追い討ちかけるのか・・・「」の人。

読み「ありがと」ついでに書きました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書こちやおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

涼乃＆王子編、無事にハッピーエンドとなりました。  
こんな感じでいかがでしょうか。

このあと、閑話が2話入りましてあと2人ほど図書委員の話を書く予定です。

涼乃＆王子や以前にくつつけたカップルも  
顔を出す予定ですので、よろしければお付き合いください。

唯ちやんは見たーの巻

夏休みが明けた9月。私の所属する2年1組にも、ちょっとざわつく出来事があった。まあ、私は知っていたので驚くほどのことじやなかつたんだけどね。

“2年1組の早川圭吾に彼女が出来た。相手は同じ2年1組の岡崎涼乃。”この出来事がもたらしたのは、1組をわざわざ覗きに行くギヤラリーの増加とクラスの団結だった。

1組の人間も早川くんが涼乃を名前呼びしだした当初こそ驚いたし、女子は涼乃に対しての嫉妬もあつたと思う。だけど、そのあとの早川くんの様子と、名前で彼を呼ぶものの早川くんを淡々とあしらう涼乃を見ているうちに、早川くんへの同情票が集まつたのか『早く、まとまつてくれ』と周囲の空気がなつていつた。

そして、今回めでたく付き合つことになつたと分かつたときにはクラス中が暖かい視線を一人に送つたのだった。

めでたく付き合つている一人だけど、嬉しそうな早川くんに對して涼乃はたいして変わつていない。お昼だって、私や女子たちと食べるし、一人で話していくても甘い雰囲気が皆無だ。

「涼乃つてさあ、あんまり変わらないよね」お昼を食べているときに私はついつい彼女に聞いてしまう。

「はあ？」訳がわからん、という顔をする涼乃。

「ほらー、よく付き合つことになるとあからさまに校内でべつたべたする人たちとかいるじゃん。そういうの、涼乃と早川にはないなあ」と思つて。

涼乃は食べていた卵焼きがのどに詰まつたらしく、急にむせだしだため私はあわてて涼乃にお茶を差し出した。

「唯ちゃん、何を突然・・・ゲホッ」咳き込んで涙目涼乃。

「いやー、あまりに涼乃が淡々としてるもんだから、ちゃんと早川

と付き合つてゐるのを認識してゐるのかと心配だ。」「

「あーの一ねー。そりやあ私は鈍いけど……ちやんと、認識して  
るよ・・・」涼乃は最後のほうは恥ずかしいのか声が小さくなつて  
いる。

私はどんどん赤くなつていく涼乃を見て思わず、かわいーと頭を  
なでてしまつた。

その後、私は早川くんに「涼乃を泣かしたら、承知しないからね」とこつそり釘をさした。すると、早川くんから真面目な顔で「川田さんには頼みがあるんだ。涼乃が何か嫌がらせされたら教えてほしい」とお願いされてしまった。

早川くん・・・それを知つてどうする気?私の疑問が顔に出ていたらしく「川田さん。涼乃は絶対、俺にそういうこと言わないでしょ。俺は涼乃に“地味で平和な高校生活”を送つてほしいだけだからさ。協力してよ」とにこやかに言われてしまつたのである。私はなんだか逆らえずにうなずいてしまつた。

読「ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちやおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

閑話その1・涼乃の親友で調理部の川田 唯の視点です。

いちおひ、シリーズ化してるので時期はいつになるかわかりませんが「図書委員会」編のあとは「調理部」編を予定しております。そのときに、唯の話を入れようと思つております。

そのぼんは見たーの巻

## 閑話・2・武内 苑子（そのぽん）の観察

夏休みが明けて、なんだか図書室に来る人が増えた気がする。しかも、受付をちらちら見ている人が多い。

一緒にカウンター当番をしている2年の松尾 恵先輩に「なんか、ここの人が多いですよね」とこっそり聞いてみた。

恵先輩は、「あ～。それはね・・・」と私にあんまり口外しないようにと念押ししたうえで「涼乃と早川王子が付き合ってるのをきつつけた人が涼乃を見に来てるんだよ」と教えてくれた。

涼乃先輩・・・いつの間に！―まじですか！―

「はあ・・・本当ですか。驚いたやいました。」

「そのぽん、その口調はあんまり驚いてない感じに聞こえるって」私は、なぜか図書委員会で「そのぽん」とあだ名がついた。あだ名をつけてくれたのは3年の古川先輩で、図書委員長をしている。

「それにしても、恵先輩。涼乃先輩、大丈夫でしょうか？」

「何が？ああ、王子ファンからの嫌がらせとか？」

「そうです。よく恋愛小説とか少女マンガであるじゃないですか。校舎の裏へ呼び出しどか」

「あと、下駄箱の上履きを隠すとかね。あ、でもうすの高校上履きないもんね。ちつ。」

「めぐちゃんも、そのぽんも・・・人で遊んでるでしょ。めぐちゃん、『ちつ』って何よ、『ちつ』て。」とカウンターから声がかかる。

そこには涼乃先輩が立っていて、「ちつといい？」と内側に入ってきた。

「涼乃。今日当番じゃないのに、どうしたの？」恵先輩が聞く。

「この時間に帰るといろんな人がこっち見てヒソヒソして嫌なんだ

よ。悪いけど裏作業手伝つから、じばらくさせで~

「私はかまわないけど、藤村さんはなんだって？」

「一言、『時の人だからね。』って笑つて許可してくれた。」

「藤村さんらしい言い方だね。じゃあ、裏作業よろしくつ。あのさ、王子にはメールしといたほうがいいんじゃないの？」 恵先輩は、あつさり涼乃先輩に作業をお願いする。

「えー、なんですよ。一緒に帰るわけじゃないし。」と不思議そうな

涼乃先輩。

「何言つてゐるのよ。閉館までここにいるとしたら部活終わる時間と重なるよ? つこでに王子と一緒に帰ればいいのに。ねえ、そのほんもそう思つよね?」

ひやー、なんでここで私にふるんですかー。恵先輩は彼氏がいらっしゃるのでそう思つかもしませんが、私は彼氏はいたことないでの、わかりませんよおつ。でも、ここで求められてる返事は「そりですよ」だらな・・・。

私は「や、そうですよ。涼乃先輩。恵先輩の言つとおりです」と答えた。

涼乃先輩は「ふーん。一人がそり言つなら、メールするかあ。そういうもんかね~」とぶちぶち言いながら、メールをするために裏へひっこんだ。

それにしても王子へ連絡するのを面倒くさがるのつて、きっと、この学校で涼乃先輩だけだと思つ・・・。

その後、閉館時間に部活帰りの早川先輩がやつてきて、せりつけうに涼乃先輩と一緒に帰つていったのは言つまでもない。

## 閑話・2・武内苑子(そのせと)の観察(後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちゃおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

閑話その2：1年生の図書委員、武内苑子視点です。

第10章は、彼女の話です。

じれじれ初恋ものにしたいのですが、どうなることやら。

## 第10章・武内 苑子の初心・1（前書き）

そのほんの「幸せの素」の巻  
第1章～第3章と同じくらいの時期です。

私は通学途中に「あの人」を見かけることができれば幸せな気分になれるというジンクスがある。

「あの人」というのは、毎朝7：45の電車で見かける男の人で、専心館高校の制服を着ている。ちなみに専心館高校というのは、泰斗高校と同じ沿線にある男子校で、県下でも有数の進学校だ。

その人を見たのは、入学してしばらくたつて通勤通学ラッシュにも慣れた連休明けのこと。その日も混雑していて、私はカバンを前に抱えて踏ん張っていた。ところが、この日は運が悪かつたとしか言いようがなかつた。私の隣にいた人がふいによろけ、私に思いつきりのしかかつてきたのだ。

ところが、私に隣の人はのしかかつてこなかつた。いつの間にか間に男の人があがり込んで、よろけた人を支えてくれていた。私はその男の人をおずおずと見上げた。専心館高校の制服である濃紺の学ランを着たキリッとした顔つきの人で、私をチラッと見ると、そのまま私の隣に立つた。

結局、お礼も言えずに最寄り駅で降りてしまった。どうして「ありがとうございました」と言えなかつたかなあ、私・・・。

その後、私が結局「あの人」のことでの分かつたのは、たまに持つて  
いる道具から剣道部ということだけだ。専心館高校の剣道部・・・  
・確かに、うちの下のお兄ちゃん、専心館高校の剣道部OBだったよ  
ね・・・・名前とか、知ってるかなあ・・・・とはいって、お兄ちゃ  
んに聞くと、いろいろうるさいから嫌だな。

昔から私のそばには常に3つ上と6つ上の兄たちがいて、男の子つてこういうもんだってイメージが兄たちで確立していたけど、それが幼稚園に入つて崩れ去つた。同じクラスの男の子は、女の子に優しくないばかりか、逆に意地悪をしたりする。

私は「うちのおにいちゃんたちとちがう~」と軽くショックを受けた。

今思うと、兄たちと男の子を無意識に比べていたらしく、中学でも男の子と話すことは、ほとんど無かつた。友達には「苑子の場合は比較対象のレベルが高すぎ。お兄さんたちみたいな男の人は普通いないよ」って言われるし。

これじゃいけないと思って男の子に少しでも馴染もうと、共学の泰斗を受験することを決めたら、両親は賛成したのに兄たちに反対された。でも両親の後押しと私の押し切りで兄たちを納得させ、私は無事に泰斗に進学することができたのだ。

結局兄たちのせいにしても、いまいち一步が出ないのは勇気がない私のせい。今の私にとって恋愛っていうのは本の中だけで遭遇する出来事だから。

読み「ありがと」「ありがとうございました」。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちゃおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！

第10章は、武内 苑子視点です。

「ラブ」かつオクテさんな彼女の恋愛話の予定です。

あんまり長くなる場合は、独立した長編にしようかなあ・・・。



駅で2番目の兄、聰太お兄ちゃんを見かけた。兄は専心館高校の制服を着た人と一緒にいたようだつた。私は声をかけようかどうか迷つたけど、ここで兄が気づいて私が無視すると後が面倒なので声をかけた。

「そうくん、今帰り？」一緒にいた人は、気をきかせたのか少し後ろに下がつてしまつたため、私には見えなかつた。

「苑子？ おまえ、帰りがいつもより遅いじゃないか。今日は委員会活動だけなのに、なんでこんなに遅く……」うわっ。聰太説教モードか？ だいたい聰太お兄ちゃんが遅いときあるのに。遅くたつて、まだ夕方6時過ぎたくらいじゃんか。

「まだ、夕方6時すぎじゃない。今日は全員ミーティングで話がちよつと盛り上がりちゃつたんだもん。全く、そうくんは心配性だよ。」

「当たり前だ。妹を心配して何が悪い」

「先輩。俺、そろそろ。」聰太お兄ちゃんに、一緒にいた人が遠慮がちに声をかけてきた。

「お、すまん。・・・苑子、こいつは俺の後輩で内藤 駿介。3年生で、剣道部の主将なんだ。内藤、これは妹の苑子。泰斗高校の1年生。」

私は兄に紹介されて、初めて顔をみた。

「うそ・・・・・「あの人」だ！！ 短い髪にキリッとした顔つき。絶対間違いない。電車で助けてくれた人だ。私は動搖が顔に出ていなことを祈つた。

「はじめまして、内藤です。」

「た、武内 苑子ですっ。あ、兄がお世話をなつてます。」

はじめましてか・・・ そうだよね。覚えてないか・・・ でもつ、

知り合えたんだからラッキーだよね？

内藤 駿介さんか・・・よしつ。名前覚えた。私は彼の顔を、もう一度見ようと顔をあげた・・・が、私の前に聰太お兄ちゃんが立つ。ちょっと、顔が見えない！！

「内藤。また話はあとで聞くから。苑子、帰るぞ。」聰太お兄ちゃんは、私の手をつかみ、さつさと内藤さんに別れを告げた。

「はい、先輩。またよろしくお願ひします。」内藤さんは、お辞儀

をして改札に向かって歩いていった。

内藤さんって、無口な人なんだなあ。顔には出してなかつたけど、私とお兄ちゃんの言い争いみて、あきれられたどうしよう・・・。聰太お兄ちゃんのバカーつ！！

読み「ありがとうございました。」

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちゃおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるといれしげです!!

名前を知るのにまるまる一章使ってしまいました。  
苑子のテンポはちょっとのんびりです。

苑子、盆と正月の巻。

聰太お兄ちゃんに紹介されてから、私と内藤さんは電車内で顔を会わせると会釈をするようになった。

私のなかではすごい進歩で、毎日がそれだけで楽しくなった。季節はいつの間にか夏休みが近くなつてきいていた。

幼稚園の頃からの親友で、高校でも同じクラスになつた遠山 樹理ちゃんは、あまりに進展の遅すぎる私がもどかしいらしい。

「オクテの苑ちゃんが、男の子と会釈をするだけで、すごい進歩だとは思うの。でもね、そろそろ話しかけてみたほうがいいって！」

「会話？ムリムリムリ！！何話したらいいのか、わかんないよ」いまだに男の子と話をするだけで内心ビビり気味の私が、内藤さんと会話なんて、想像がつかない。

10の日は、注文した本を受け取る予定があつたので、学校の最寄り駅前にある大きな本屋に立ち寄つた。本を購入し、ついでに中を見て回る。海外文学、日本文学、雑誌、「ミシクス……」と一通り巡つたところで私は大学受験問題集のそばを通りかかつた。

そこに、内藤さんがいた。1冊ずつ手に取り、丹念に吟味していり歩いていった。

内藤さんは受験生なのだ、と改めて実感した。もしかしたら、今年が近づける最後のチャンスなのかもしれない……でも、真剣なときには話しかけるのつて邪魔してるみたいで気が引ける。

私は、自分も問題集を探そうと思い立つて、内藤さんのいるあたりに歩いていった。

あわよくば、視界に入らないかな……と、不純な動機もあつた。

そういえば、私、自分で問題集とか参考書つて買ったことないや。いつも一番上の伊織お兄ちゃんか聰太お兄ちゃんが、「苑子に合いそうだから」と選んでくれたので勉強してた。

「問題集って、こつぱーあるんだなあ・・・」とぼそりとつぶやいたり、「どの科田を探してるんですか?」と隣から声をかけられた。ふと見ると、内藤さんがこちらを見ていた。

「！」こんにちは。内藤さん。」

「どりも。武内さんも、問題集を見に来たんですか?」

「あ・・・えと。今日は注文した本を購入するために来たのですが、ついでに中をみてにこなかんと思つて・・・」

「そうですか。」

「あ、あの。内藤さんは、お田の問題集は見つかったのですか?」

内藤さんは、1冊の問題集を手に取っていた。

「めぼしいのが1冊ありました」

「そうですか」

「それでは、失礼します」内藤さんは軽く会釈をしてレジに向かって歩いていった。

「は、はい・・・」私は会釈をすることしかできなかつた。

私も、内藤さんに少し遅れて、売り場を離れ出口に向かつて歩いていく。

すると後ろから「武内さん」と呼び止められた。振り向くと、本屋の袋を持った内藤さんが立つてゐる。しかも、すこし急いできたみたいだ。

「はい」

「他に用事がないなら、もう夕方ですし、一緒に駅まで行きますか?」

「は、はいっ。」

うれしーっ。盆と正月がいつぺんに来たつてこいつ」とを囁つんだわ。

### - 3 (後書き)

読み「ありがとうございました」

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちやおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

少しは進展したのかな・・・

苑子、盆と正月パーティーの巻

「あの、内藤さん」

「はい」

「今日は、部活はないのですか?」

「部活は、休みです。それに、もうすぐ引退ですからね。」

「何月に引退ですか?」

「9月に行われる他校との交流試合が終わったら引退です。」

「そうですか・・・あの内藤さんはいつも同じ駅から、あの電車に乗るんですか?」

内藤さんは、私の降りる駅の2つ先の駅名を言った。

「私の降りる駅は・・・あ、ご存知ですよね。」

「一緒に電車で帰りますか?」

「は、はいっ。」

きやーっ。盆と正月パーティー!

でも、一緒に電車に乗つても、私たちの間にさつき以上の会話がなかつた・・・。

もつと、私から話しかけたほうがいいのかもしれないけど・・・でも、内藤さんの隣で黙つて立つてているだけで、なんだか幸せ。いつの間にか、私の降りる駅に到着したため私は内藤さんに「駅に着きましたので、降ります。」と会釈して電車を降りた。内藤さんは「気をつけて」と会釈してくれた。

家に帰ると、聰太お兄ちゃんが珍しく家にいた。

「苑子、おかえり。遅かったな・・・本屋か?」

「うん。取り寄せでもらった本を買つてきたの。あ、今日ね本屋で内藤さんにばつたり会つたよ。」

夕方だから同じ電車で帰りませんか?って言つてくれたから、同じ

電車で帰ってきた

「へえ・・・」聰太お兄ちゃんが、珍しそうに言つた。

「どうしたの?」

「あ、俺ちょっと部屋いく。夕飯なつたら呼んで」

聰太お兄ちゃんは、そそくかと部屋に行ってしまった。変なの。

明日、また電車で内藤さんに会えるかなあ。あの混雑で近づける  
かどうかもわからぬけど、

今度は会釈だけじゃなくて話ができるといこなと思つた。

#### ・4（後書き）

読つてありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちやおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけねといれしげです！！

余詰までに・4までかかつてゐる・・・。

自分で書いててなんですが、進展が遅い・・・。

聰太兄ちゃんは考えたの巻。

苑子から駿介と同じ電車に乗つて帰つてきたと聞いたとき、俺は内心の驚きを隠すために部屋に戻つた。

内藤といえば、俺が専心館の剣道部にいた頃から「愛想のない男」で、俺らが女の話で盛り上がつても我関せずスルー。通学途中に逆ナンパに遭遇しても相手の女の子を冷たく断つたとか、チヨコをもらつてもその場で返したとか・・・・要するに女の子に冷たい男だという評価だつたんだけど・・・どうして苑子と一緒に帰る気になつたんだろう？

苑子は内藤が気になつてるのが丸わかりだけど、内藤のほうは・・・慣れると話やすいやつだが、あいつの思考だけは昔から読めん。

ただ、駅でばつたり会つたときに、内藤は苑子に「はじめましてつて挨拶してたけど、あれは嘘だ。

なぜなら、苑子は覚えてないかもしれないけど、一人は会つている。

昨年の夏休み、伊織兄（兄も専心館O·Bだ）が苑子の受験勉強を見るために帰省してきた。そのとき、伊織兄に頼んで剣道部で練習中の俺のところに苑子を連れてきてもらうことにした。

苑子は最初、「えー、なんで男子校に行かなきゃいけないの？」と渋つっていたが、俺と伊織兄が「泰斗は共学なんだから、男子に多少馴染まないとダメだぞ」と説得したのだ。

もつとも、苑子一人で来させるつもりは全然なく伊織兄がつくることは最初から決めていた。

「俺、苑子特製のママレード入りのスコーンが食べたいから、よろしくな。」受験があるからと、苑子は趣味のお菓子作りも自粛していた。趣味はストレス解消になるんじやないかという俺の配慮だ。

俺の配慮もしらずに苑子は「えー、そうくんのわがまま〜。」と

口をとがらせていたが……。

そのとき、部長だつた俺と一緒に苑子からの差し入れを受け取つたのが、当時副部長だつた内藤。苑子の顔を見て御礼を言つていたし、人の顔を覚えるのが確か得意だ。たぶん、苑子を見たときに「あつ」と思つたははずだ。

苑子のほうは……あれば、今より輪をかけて同年代の男が苦手だつたからなあ……おまけに人見知りときてる。間違いなく、覚えてないだろ？

「妹と一緒に電車だつたんだつて？」なんて電話するのも変だし、といつて苑子が泣くようなことになつたら、俺が内藤を稽古にかこつけて、ぼっこぼこにしてしまうかもしれない。

でも、一人の反応を見てみたい。「ここは、兄ちゃんが妹にお紹介をしてみるか……」ちょうど、内藤は俺に相談事があるらしくて、一度会う予定になつてている。会う場所を家にすればいい。

苑子には菓子を手作りしておくように前もつて頼んでおけば、ぶうぶう言いつつも喜んで作つてくれるはずだ。

俺は、早速内藤に電話をかけることにした。

## - 5 武内 聰太の思惑（後書き）

読み「ありがと」「や」といました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちやおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

・4のラストで、どうして聰太は変だつたのか？といつのを書いておじりと思いました。

第11章は違う図書委員の話になります。

恵と無自覚のタラシ。の巻

私が土屋先輩と知り合ったのは昨年の夏だ。

同じ図書委員の岡崎涼乃と私は、図書館の返却本を棚に戻す作業をしていた。たまたま手に取った本が重くて、私は思わずよろけてしまった。

「めぐちゃん！！」涼乃が手を差し出そうとしたときに、私を後ろから助けてくれたのが土屋先輩だった。

「大丈夫？」後ろから声をかけられ、私はあわてて声のほうを向いて「どうも、すみませんでした！」と平謝り。

土屋先輩は笑って「この本を棚に戻すの？・・・結構重いね。俺が戻してあげるよ」と本まで戻してくれたのだ。

まさに、そのときの先輩は「少女マンガに出てくる主人公憧れの男子」みたいだった・・・

そして現在、土屋先輩に対する私の評価は、今では「無自覚のタラシ」と大幅に変化した。

先輩は、土屋 信康という戦国武将みたいな名前だけど、重厚さの力ケラもない。

同級生の早川くんが「女子同士の揉め事の裏に早川あり」と言われているけど、土屋先輩も似たようなものだ。ただ、二人の違う点は、早川くんは本人の知らないところで女子たちが勝手に彼を巡つてもめていることがほとんどで、土屋先輩の場合は、本人いわく“誰にでも優しくしてしまつおまえの態度が女の子の誤解を招き、揉め事が起こるんだ”って、平田先輩に言わされたらしい。

「“タラシ”と言われるのは心外だなあ。好きな子に誤解されちゃうじゃないか」。ねえ？恵ちゃん

本の返却ワゴンを押している私のそばにきて、先輩は話し続ける。

「誤解されるような行動を慎めばいいだけなんじゃないですか、土

屋先輩」

「も～、相変わらず辛らつだねえ。恵ちゃんは」

土屋先輩は、生徒会長の平田先輩と仲がよくて科学部の部長だ。図書室の常連でもあつたことから、自然とカウンターにいるときに言葉を交わすよになつた。いつのまにか、先輩に「松尾さん」から「恵ちゃん」と呼ばれるよになつていて、私も気軽に話せる先輩として認識するよになつた。

「で、今日は何を探しに来たんですか？」

「うう・・冷たい扱いだなあ。ちょっと橋野先生に頼まれて、化学関係の資料を探しにきたんだ。ところで、どう? これマイ白衣なんだ?。俺って白衣が似合つと思わない?」と私に白衣を見せる先輩。

「先輩、私、白衣はそんなにツボじやないです」

「えーっ。図書委員は白衣好きって聞いたのに。だから恵ちゃんに見せにきたのこ～」

「・・・誰ですか、そんなことこつたの」確かに、同じ図書委員の涼乃は白衣好きだけだ。

## 第1-1章・松尾 恵の筆絵 -1（後書き）

読み「ありがと」「ありがとうございました」。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちゃおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

第1-1章は涼乃と同級生の図書委員、  
松尾恵視点です。

## - 2 (前書き)

恵とタクシの爆弾発言。の巻

時期的に第1-1章は、第1章-3の後から第4章-2の前までの間  
くらいです。

2年生になつてしまはいたら、涼乃が“話題の人”と化していった。

同じクラスの女の子から「ねえねえ、松尾さん。1組の岡崎さんと同じ図書委員だよね。岡崎さんって、どんな人?」と言葉は違うけど、同じことを聞かれていた。

涼乃・・・「地味で平和な高校生活」がモットーのはずが、何をした?

「涼乃、あんた何やつたのよ」<sup>3</sup> 3番で一緒にいた、私は思わず聞いてしまった。

「私は何にもしないよ、めぐちゃん。早川王子のせいだよ・・・・・涼乃の氣力のない答えに、私はこわさか心配になつてきました。

「私でよかつたら、聞くよ?」

「うん・・・・・唯ちゃんとも待ち合わせてるから、一緒に話、聞いてくれる?」

唯ちゃんは、涼乃の友達で私も涼乃に紹介されて仲良くなつた。帰りに3人でお茶して帰ろう、ということになつた。

委員の仕事を終えて、私たちは唯ちゃんと会流して涼乃の話を聞くべく駅に近いカフェに立ち寄つた。

「王子に、付き合おうって言つて断つたら、強引にメールアド交換をせられたんだよ・・・・。そしたら1日1回メールが来てさ、すっかりメル友。私、断つたのに、どうしてこんなことになつたんだろ・・・・

は〜〜〜と涼乃は長いため息をついた。

私は、明るくて可愛らしいクラスでも人気者。ポジションにいる子じゃなくて地味な涼乃の良さを知つてるので“王子って結構見る目あるじやん”とちょっと感心した。

唯ちゃんも同じだつたらしくて「あのぞ、涼乃。私は王子が、見

た日に惑わされない感じで結構気に入つたな。めぐちゃんは?」

「私も唯ちゃんと同じ。涼乃、王子つて見た目はああだけど、きつ

と中身は違つと思ひ。とりあえずメル友してみたら?」

「そういうもんだろ?か・・・確かに王子つて悪い人じやないん

だけど・・・なんつーかキラキラでまぶしすぎるんだけど。」

「確かに・・・キラキラだよね」

「うん・・・あれば地味な私らには直視できないね・・・」

「なんで、こんなことになつたのかなあ。王子の好みつて変だよ

」。

それから涼乃のグチをとことん聞いていたら、涼乃も気が楽になつてきたりしく「わかつた。とりあえずメル友してみる。話聞いてくれてありがと・・・また、何かあつたら聞いてくれる?」

私たちは快く了解して、この日は解散となつた。

涼乃たちとは駅で別れ、私は改札口へ向かつていたときに「松

尾じやないか?」と声をかけられた。

そこには、元彼と彼女らしき女の子がいた。

元彼とは中3になつて付き合い始めた。高校が別になつてから二人の間に溝ができて、高1のときに彼に好きな女の子ができたのがわかつて、私から別れを告げた。

そういうえば、そのときの彼のセリフ・・・泰斗に行つて私の引け目を感じてるときに、同じ高校の女の子と遊んだら話が合つて楽しくてズルズル、だつけ。

まさか、自分の通つてる高校の最寄り駅で、ばつたり会つことになるとは・・・。

「元気そうだな」なんだか、すっかりチヤラくなつたなー、元彼。  
「この駅、そつちの高校の最寄駅じやないよね?どうしたの?  
「ちょっと、この辺に用があつて」

「そう。」

「ねえねえ、この人がモトカノ～？」と彼女らしき人が私をジロジロ見る。

「そう。泰斗に通つてんだ」

「へ～。頭いいんだあ。」なんだか感じの悪い女の子だなあ・・・。

「めーぐみちゃん、お待たせ」後ろから聞こえた声・・・見ると、土屋先輩が立つていた。

「あ、土屋先輩。」

元彼と彼女は、突然現れた土屋先輩に驚いた。

「誰だよ、あんた」

「ん？俺は恵ちゃんの彼氏だよ？」さうと土屋先輩はとんでもない発言をした。

何ですと？何を言つてる・・・この人？

読み「ありがとうございました」

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書こぢやおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるどうれしいです!!

不本意ながら、早川くんとメル友になってしまった後の涼乃の様子を恵視点で書いてみました。このあと、名前呼びをするために（笑）。

恵と黒こタラシ。の巻

先輩の発言に私は固まってしまった。いつ、私が土屋先輩の彼女になつたんだ？

元彼のほうは、「うそだろ？松尾に彼氏かよ・・・」と彼女を連れて、いつのまにかいなくなつていた。おい、私にそんなに彼氏がいてシヨックなのが、失礼な。

「ありがとうございました、土屋先輩」

「なーんか、チャラい男だつたね。」

「以前は、爽やか男子だつたんですけどね。久しぶりに見ましたけど、変わつたなあ」

「恵ちゃんの元彼？」

「そうです。高校が別々になつたときに向ひに好きな女の子ができて、二股かけられまして。私から振つてやりました」

「二股？そりやあ許せないな」

「ふふ。許せないですよね。私、元彼の別れ際のセリフを思い出しちゃいました。あの人は、泰斗に行つてる私に引け目を感じて、浮氣をしたと言つたんですよ。訳分かりませんよ。」

「バカな男だね。恵ちゃんと別れるなんてさ」

「うーん、私結構すげえ言ひますからね」、彼にはきつかったんでしょう

「俺なら、恵ちゃんの口の悪さはOKなんだけどな」

「何言つてるんですか、土屋先輩」

「いや、まじで。」

「へ」

「松尾恵さん。俺とつきあつてくれませんか？」

「は

土屋先輩は、めったに見せない真面目な顔をして私を見つめる。

「俺が恵ちゃんのこと好きなの、ぜんぜん気づいてなかつたでしょう」

「はい」

「あつやつ言うなあ・・・。恵ちゃんらしいね。」

「はあ」

「話しやすい先輩っていうポジションは確保したけど、それ以上はどうしたらいいかって考えてたら、さつきの出来事に遭遇してや。これはチャンスと思ったわけ」笑顔で話す土屋先輩。  
チャンスって、何のチャンスだ。私の疑問が顔に出ていたのか、土屋先輩はニヤリとした。

「既成事実を作るチャンス。だつて、さつきの俺の発言、聞こえちゃつた人もいるだろうしさ。恵ちゃんの性格から、この場で彼氏じやありませんって言えないだろ? ほら、うちの学校の生徒がまだこの辺にいる時間帯だしね。」

はつ! - - ここは駄・ - - そして、周囲には部活帰りの泰斗の生徒・  
・ - - そして、土屋先輩は有名人。

私たちは、至近距離でお互いに顔を見ている。これを周囲が「見つめあつてる」なんて解釈したら・ - - えーつ。こんなのがありかよつ! - !

先輩の事は嫌いじゃないけど、このやつ口は卑怯だと思つ。

「・ - - 先輩のやりかたは、卑怯です」

「そうだね。俺つて卑怯な男なのよ、ほんとは。だつて、恵ちゃんを離すのがいやなんだもん」

「私は先輩が離したくないと思つような、たいそうな人間じゃないです」

「俺にとつては、たいそうな人間だよ。恵ちゃんはかわいい」

「土屋先輩・ - - そういうことをサラつとつこの止めて下さい」

「そういうことって？」この人……絶対知つて、とぼけてる。  
「う・・・か、かわいいとか・・・。恥ずかしいです」

「じゃあ、慣れて。」

「は？」

「俺、これから恵ちゃんに、たーくさん、やつこつひとつづかう。  
慣れようね？」

「・・・・私の気持ちは無視ですか。」

「え？ だつて、恵ちゃん俺のこと嫌いじゃないよね。ヒーハーとは、  
これから口説き落とせばいいだけじゃん。」

なんだろう、土屋先輩の強気な自信・・・・・といったところから沸  
いて出るんだ。

そして私は“この人に口説き落とされても・・・まあ、いいか”  
と、既に先輩の術中にはまつていた。

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちゃおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

土屋先輩・・・おもしろキャラにあるはずが、どうしてこんなキャラになつたのか?

次回は閑話で早川くんのちょっと違つ一面の話です。

今さらですが、第6章でちらりと出てきた件の決着編になります。

閑話：早川圭吾の決着（前書き）

悪役王子。の巻

## 閑話：早川 圭吾の決着

夏休み中に、俺はずっと好きだった涼乃と両思いになつた。新学期からの学校生活は楽しくなること間違いなしだ。

しかし、俺には夏休み中に解決しておきたい懸念事項が一つある。それは、夏休み前から俺に付きまとつている1年生の派手な女子のことだつた。俺は名前も忘れていたが涼乃から「桜井さん」と教わつた

どうやら、部活説明会のときに目をつけられたのか図書室でつまつたり、俺の部活帰りとかに出没して付きまとつてくる。何度もはつきりと断りの文句を述べているけど、どうも彼女は俺が付き合つている女の子がいないのに、自分のことを断つてることが信じられないらしい。あの子は、相当自信家のようなだ。

「圭吾、もてんなあ。あの子、1年の桜井さんだろ?」と同じテニス部の友人・高田に言われるのも、いい加減うつとうしい。

部活が終わり、わいわいと大人數で正門まで歩いていくと、夏休み中だというのに桜井さんが立つていた。

「テニス部の部活が終わる頃に、ここにいれば早川先輩に会えるかなと思って」と桜井さんは笑う。

ボーッとみてる奴もいるけど、俺には効果がないよ、桜井さん。いい加減、わかってほしいよなあ。

この子の自信家ぶりだと、俺の断り方一つで涼乃に嫌がらせするかもしれない。ここはひとつ、最低の男だと思わせるような断り方をしたほうがいいな。

「えーと、名前なんだっけ

「ひつどーい、先輩。私、たくさん名前いつたじやないですか。

桜井です。桜井 麗香」

「俺さあ、興味のない人間の名前、何度も聞いても覚えなくてね。だから、何度も来られても俺、あなたの存在、ぜったい覚えないから。」

桜井（もう呼び捨て）の顔色が変わった。テニス部員が大勢いるまで邪険にされたのだ。今まで、その外見で断られたことがないんだろうな。悪かったな。俺はどーでもいい人間には関心がないんだよ。

「おまえ・・・それはひどいのでは」と高田は口ではそう言つが、俺が困つていたのを高田はしつついるので、それ以上は何も言わない。

「俺ね、ついこの間、かわいい彼女ができたから。俺に付きまとつても時間のムダだよ。」再度のダメ押し。

「彼女・・・って誰ですか？あの2年地味で普通な人ですか」失礼な。涼乃は俺にとつては特別な女の子だ。

「彼女の事を、あんたにとやかく言われる筋合いはないよ。不愉快。

「他のテニス部員たちは、先輩、ひどいっすよ」とか「早川、言葉選んでやれよ」とか言つてるが、俺が彼女に辟易しているのを知つていて、彼女の擁護をする人間がいない。

桜井はキッと俺をにらんで「わかりましたっ！！今まで時間の無駄でした！！」と言い捨てて走り去つていった。

「逆ギレで退場か。あつちが本性かな。」俺の心を読んだような高田の口ぶり。

「俺は、あの子が俺の視界から消えてくれれば、どうでもいい」ほんとに。

午後、涼乃と会つたときに「今日、何かいことあったの？」と聞かれた。

「どうして？」

「だって、なんか悩み事が解決したって感じがするから」

「うん。確かに解決したことがあるんだ」

「へえ。よかつたね」涼乃は、相手が話すまでは根掘り葉掘り聞いたりしない。俺も、自分のああいうブラックな部分は彼女に知られたくない。だから、今は彼女のこの性格でよかつたと思った。

閑話：早川圭吾の決着（後書き）

読み「ありがと」が「わざわざ」になりました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちゃおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるどうれしいです！！

早川くんにも、こんな一面が・・・といつ話にしてみたかったのですが、いかがでしたか？

聰太のサプライズ。の巻

「苑子、今度の日曜日に俺の友達が来るから、なんかお菓子焼いてくれないか？」

今日は金曜日。朝、顔を合わせた聰太お兄ちゃんが、いきなり頼んできた。

「日曜日?...急だね」

「その日しかお互いの都合が合つ日がなくてな。悪いつ！頼めないか？」聰太お兄ちゃんにおがまれてしまった。

日曜は何の用事もないから、家にいる。朝早く起きれば作れるから聰太お兄ちゃんの頼みを聞いて、恩を売つておぐのもいいかもしれない。

「いいよ。なんか作るよ。」

「おお～～。ありがと。楽しみにしてるよ」聰太お兄ちゃんは笑顔になつた。

うーん、何を作らうかな。家にあるレシピから考える。ううううこと考えるのつて楽しいから好き。

日曜日、両親は「一人でテーートしてくるからね」と言つて残し、出かけていった。

私はキャラットケーキを作り始めた。パウンドケーキ型で何本か作つて、あした樹理ちゃんや図書委員会のミーティングで食べよう。

「おはよ～」と焼きあがつた頃に聰太お兄ちゃんが顔を出した。

「おはよ～、そうくん。友達は何時ごろに来るの？」

「あー・・・確かに午後。そうだ、苑子、悪いけど今日は部屋まで持つてきてくれない？」

「そりくんや、おりくんの友達が来ると私には顔を出すなつていつも言つくなせに。変なの」

「今日は頼むよ～。後で勉強みてやるかわ～。お前、また数学詰ま

つてんだろう？」

「・・・なんで知ってるのよ」

「昨日の夜、「わかんなーい」ってぶつぶつ言つてただろ。自分の部屋に入るときに聞こえたぞ」

私は、負けた。

お昼が過ぎ、インターホンが鳴つた。「お、きたきた。苑子、お茶とお菓子よろしくな」と聰太お兄ちゃんが友達を迎えるために部屋を出て行つた。じつに聞こえない程度の声でなにか話して、二人は聰太お兄ちゃんの部屋に入つていつた。

「そろそろ、持つて行つてもいいかな」私は充分に冷ましたケーキと紅茶を持つてお兄ちゃんの部屋に向かつた。

「そうくーん。ケーキ持つてきたよ」

「おー。入れよ、苑子」と言われたので、私は扉を開けた。

そこには、私服姿の内藤さんがいて私に「おじやましてます」と頭を下がた。

私は、びっくりして聰太お兄ちゃんを見た。お兄ちゃんの顔は・・・まさに「してやつたり」だった。

「い、こんにちは」と挨拶をした私が、ケーキもお茶も「ほわすに置けたことは自分を褒めたい。

そのあとは、そそくさとお兄ちゃんの部屋を出て・・・居間で座り込んでしまつた。

読み「ありがとうございました」。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書こちやおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

ちなみに苑子は聰太のことを「ナウくん」、伊織のことを「おりくん」と呼んでます。

苑子の幸せな時間。  
の巻

びつくりした。お兄ちゃんの友達って、内藤さんだつたんだ。  
しかも、お兄ちゃんのあの顔。絶対、私が内藤さんを気にして  
つて分かつてる顔だよ。

「とりあえず・・・残りのケーキをスライスしよ・・・」両親の  
分、樹理ちゃんにあげる分、図書委員会で食べる分・・・そつだ、  
内藤さんにあげたら、食べてくれるかな。

もらつてくれるかも分からぬけど、私は内藤さんの分として2  
切れを包装袋に入れた。

いつの間にか、居間でつとつとしていた私は「苑子」とお兄ちゃ  
んに起こされた。

「ん? なに?」

「俺、内藤と外でご飯食べてくれるけど、お前も一緒に行く?」

「へつ・・・わ、わたしはいいや。家にあるもので適当に作るか  
ら」

お兄ちゃんと一緒にかく、内藤さんと一緒に緊張して  
何も食べれないよつ! -

「ふーん。まだそこまで馴染んでないのか」

「はい?」

「いや・・・なんでも。あ、俺着替えてくるかわ、内藤の相手しと  
いてよ」

「え・・・ちょっと、そろくん! -」

私が戸惑つているうちに、内藤さんが居間にやつてきていた。

「内藤さん・・・あの、ケーキはどうでしたか?」

「美味しかつたです。武内さんは、お菓子作りが上手なんですね」

「ありがとう」ぞこます・・・あ、あのつーこれ、よかつたらどう  
ぞ!」私はありつたけの勇氣を出して内藤さん用に分けておいた袋

を差し出した。

「あれ？ これ……？」

「さっき、お出ししたケーキです。明日、友達と食べようかと多めに焼いたので……あのっ、」

「どうもありがとうございます」内藤さんは、ちよつと笑つて受け取つてくれた。

しかし、ここから先の会話が続かない……私も無口だけど、内藤さんも無口。そんな空気を破つたのは、もちろん聰太お兄ちゃんだった。

「わりー、待たせたな。内藤。……と、お前何持つてんの？ それ、さっきのケーキか？」

「先ほど妹さんにいただきました」

「ふーん。内藤が俺の妹とはいえ、女の子からプレゼントを受け取るなんて珍しい。いつもなら黙つてその場で返すのに……へーえ。ほーお、苑子、よかつたなあ」

「そうくん！ 何言つてるのようー！ 内藤さん、困つてるじゃないの。ごめんなさい、内藤さん。バカな兄ですけど、これからも仲良くしてください」何考てるのか知らないけど、恥ずかしい！ ……このバカ兄！ ！

「苑子……兄ちゃんにバカとはなんだバカとはーー！」

「なによーーー！」

一人で言い争つてると、突然「ふつ・・・」と笑い声がした。

見ると、内藤さんが「ふつ・・・ははははは」とお腹を抱えて大笑いしている。へー、内藤さんも大口あけて笑うんだ。

ひとしきり大笑いしたあとに、内藤さんは私たちを見て「す、すいません……聰太先輩。妹さん、おとなしい人だと思っていましたけど……結構、言つんですね。聰太先輩にあんだけ食つてかかるのつて、妹さんくらいですよね……」とちよつと涙目になつて笑つている。

「内藤・・・お前、笑いすぎ。ま、いいや。じゃあ、苑子行つてくれるから。なるべく早く帰つてくるけど、インターホンが鳴つても知らない人だつたら、出ちやだめだぞ」

「そうくん、私をいくつだと思ってるのよ・・・」

内藤さんは、また噴出しそうになつてたけど、聰太お兄ちゃんを見て、下を向いてこらえている。

「うううう・・・今日はケーキを出すときも恥ずかしかつたけど、後のほうがもつと恥ずかしい！」

大笑いされちゃつたし・・・でも、その大笑いで聰太お兄ちゃんとケンカにならずに、なんとなく仲直りてきてよかつたかも。

## -2 (後書き)

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちゃおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

-3は聰太視点で、この後の話です。

- 3 · 武内 聰太の思惑2（前書き）

聰太の尋問。 の巻

内藤にケー キを持 てき たときの苑子は、 と てもわ かりやす かっ た。

あん なに、 ギクシャク し、 よく、 ほたなかつた なあ。 もつとも、 苑子は見 てないかも しれ ない けど 内藤も 同じく うり、 ギクシャク し てた。

それ にし ても、 さつきの 内藤の大笑い に驚いた。 あいつも、 大 口あ けて笑うんだ な。

二人で ラーメンを 食べ つ、 思わ ず、「 さつきの、 内藤の大笑いに は驚いたよ。」

「 すみませ ん。 なんか先輩と妹さん のケンカが ほほえましくて、 つ い」

「 あれが、 ほほえましいかねえ。」

「 先輩も 知つてるとおり、 うち は父の赴任先に 母親が 付いて行つ てるので、 男ばっかり 3人の 兄弟暮らし です。 手作りのお菓子なん て縁ありませ ん。」

「 妹は ない けど、 彼女ならあるんじや ない のか?」

「 彼女、 ですか」

「 お前、 昔からもてるじ ゃんか」

「 ・・・」そこ は黙殺かよ、 内藤。

「 あのね ・・・ すんげえお節介かも しれ ない んだけ ど、 一つ 聞い てもいい か?」

「 なんですか?」

「 うち の苑子 ・・・ どう思つ?」

ガチヤン。 内藤が使つて いたレンゲを 落と した。 そして 何か考え 込んで いる ・・・ こりや、 まさか。

「 妹さん、 ですか? ・・・ えー と、 そ うです ね ・・・」

そのまま内藤は、俺の質問を黙殺して、ひたすらラーメンを食べていた。

「ま、ムリには聞かないよ。」

俺も黙つてラーメンをすする。

「先輩。妹さんですけど、たとえがどうかと思いますが、小動物みたいで面白いです。」

「小動物・・・ハムスターとかうさぎか?」

「そうです。昔、うちの弟が飼育してたハムスターを思い出しました」

苑子がハムスター・・・確かにそうかもしれない。俺は思わず笑つてしまつた。

「今は、見て面白いだけですけど・・・先輩、先のことは誰にも分かりませんから」と内藤は笑つた。

確かに、内藤は苑子のことを嫌いではないらしい・・・。「面白い」って理由は苑子には明かせないが。

「ま、うちの小動物は内藤なら大事にしてくれそうだから、譲つてもいいけどな」

「そうですか。そのときは大事にしますよ」

「そうか。俺はその言葉、忘れないからな」

俺たちはラーメン屋を出て、そこで別れた。

### -3・武内 聰太の思惑2（後書き）

読み「ありがとうございました」。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書いたらやおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

聰太の尋問は不発なんだけど、内藤が含みのある発言をしています。

次回は土屋先輩視点の話になります。

土屋先輩の嗜好（笑）の巻。

俺の彼女、松尾恵ちゃんは（本人は彼女だと認めてないけど）、見た目は、おとなしげだけど実は、しつかり者の女の子だ。古川さんによれば、来年の図書委員長に決まつたらしい。

俺の呂田（恵ちゃんに言わせると策略）がきっかけになつて、付き合つていつつ合あひ合あひになつたんだけど、恵ちゃんは俺のことを“土屋先輩”としか呼んでくれない。

あんまり贅沢言わないから、せめて“信康くん”と呼んでくれたらなあ・・・。

「ねえ恵ちゃん」「なんですか？」  
「まだ、俺のこと“土屋先輩”？」  
「そうです。当分“土屋先輩”です。」「ええ～なんですよ。彼氏なのに～」「私が“彼氏”だと思えるようになつたら、先輩をとつて“土屋くん”にします。」「それでも“土屋くん”？」  
「何か、文句が？」恵ちゃんの冷めた視線が俺を見る。

「うう・・・せめて“信康くん”とかにしない？」「しません。でも私、先輩嫌いじゃないですか。ちゃんと、その・・・彼氏として見られるように考えますから・・・それまで、待つていただけないですか？」  
「う。恵ちゃん、かわいいなー。俺が178cmで恵ちゃんが160cmくらいなので、チラツと俺を見るしぐさがかわいい。」「・・・恵ちゃん、かわいい・・・」「だから、そういうことをサラッとこうのまやめてくださいよ」と

たんに恵ちゃんの冷めた視線が俺につきあわる。

「やめないよ。慣れてつていつたでしょ？」

「へへへ！」恵ちゃんの顔が赤くなつて絶句。

「ね、恵ちゃん。今度の休みに出かけようよ。デートしよ、デート

」

「・・・土屋先輩、受験勉強してくださつよ。今度の休みは外出の予定があるので、都合が悪いです。」

「えへへへ。恵ちゃん、つめたい。俺、悲しい」

「・・・先輩、そういう態度はうつうつしきだけで、心に響きませんよ」

彼女のツツ「ハハは親しい人にしか見せないつて知つてるから、俺も口では「悲しい」といいつつも、ちょっとうれしいんだよなあ。

でも、これも言つと「変態ですか」とか言われる」と間違いなし。

とりあえず、休みには会えないことが分かったので、俺は彼女に言われたとおり受験勉強に励むことにした。

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書いてちゃおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

第1-1章の続きになります。土屋先輩の恵ちゃんラブ（爆）ぶりをお楽しみください。

土屋先輩、棚からぼたもち。の巻

結局「土屋くん」と呼ばれないまま、季節は一学期の期末テストを終えてもうすぐ夏休み。

今日は恵ちゃんが放課後一番で、俺は化学部が休みのため図書室で恵ちゃん待ち。

付き合つて最初の頃は「悪いから待つてなくていいです」と言っていたけど、今は終わる前に俺のところにきて「あと15分くらいで終わりますから」とか言つていく。

うんうん。いつも同じような進展してるとか。

恵ちゃんと帰り道を歩く。たまにチラチラと見ていく生徒がいるけど、恵ちゃんは気にしてないみたいだ。

「もうすぐ夏休みだね、恵ちゃん」

「そうですね。」

「恵ちゃんは、夏休みどうするの?」

俺が質問したあと、なぜか恵ちゃんが急にもじもじし始めた。

「・・・土屋先輩つて理数系、特に物理が学年トップだと前に瑞穂先輩に聞いたことがあるのですが・・・」

「ま、好きな科目だし、そっち方面の大学行きたいし・・・どうしたの?」

「じ、実は・・・先輩、私・・・物理がすごく苦手で期末もギリギリだったんです・・・勉強の邪魔をしてしまって、どうしようかと思つたのですが・・・できたら、教えてほし・・・」

「・・・物理が得意でよかつたじゃん、俺!」

「恵ちゃん!...ばっかり教えてあげるよ!...一緒に勉強しよう!...」

「は、はこつ。ありがとうございます!」

「じゃあ、俺も恵ちゃんにお願いしていい？」

「え・・・」恵ちゃんは若干引き気味。俺はそんなに「えげつないお願い」をするタイプに見えるのだろうか。

「俺の勉強の息抜きにつきあってよ。」

「息抜きに、ですか？」

「そう。データしよう、データー」

「だつて・・・先輩、受験生・・・」

「受験生だつて、息抜きしたい！ね？」

恵ちゃんは、しばらく無言で考えた後、「やうですね。息抜き必要ですね」と笑つてOKしてくれた。

読み「ありがとうございました」

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書にちやおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるといれしいです!!

土屋先輩がちょっとだけ報われています。

信康と孝一郎。の巻

恵ちゃん」と「デートの約束」と浮かれていたものの、俺はふと疑問に思った。

“高校生つてどうでデートするんだ？”ネットで調べてみると…遊園地、映画、水族館、ショッピング、美術館…。“お互いの家”なんてのもある。

そういえば、俺、逆ナンしていくる女の子と適当にそのまま場付き合いばかりだったので、ちゃんと好きになつた女の子って、恵ちゃんが初めてかもしれない…。

翌日の放課後。俺は生徒会室にいる孝一郎のところに顔をだした。「なー、孝一郎。」俺は生徒会室でパソコン使つて仕事中の孝一郎に話しかけた。

「…・・・・・信康、化学部の活動はどうした」孝一郎はパソコンの画面から手を離して俺を見た。

「ちょっとさぼり。お前に聞きたいことあつたら」

「なんだ」

「孝一郎つてさ、古川さんとどうでデートしてんの？」

「はあ？ それ聞いてどうすんだよ」孝一郎は俺の意外な質問に驚いている。

「お前、知ってるだろ？ 俺が告白してデートしてっていう段階踏んだ男女交際したことないの。もー食い散らかしてばかりで」

「あー、確かにうちの学校の子には手を出さないんだっけ…・・・今は出してるよな。まったく、松尾さんと知り合つ前の、学校外のお前の行動は褒められたもんじゃなかつたな。」

「ふん。お前もたいして…」

「俺は、告白されて付き合つてみて価値観の相違を感じて別れると、このを短期間で繰り返してただけ。逆ナンされて適当に食い散ら

かすお前とは違う

「う・・・それで、質問の答えはないのかよ」

「お互いの家。受験勉強してる。」

「・・・・・どこも出かけないのかよ。」

「近所の公園で勉強の息抜きに散歩。息抜きに『テート』よいつと言つたら散歩でいいと言われた。まあ・・・お楽しみはこれからだな。」

孝一郎が、古川さんの話をするときの顔を、俺は鏡で孝一郎にそのうち見せてやるうと思う。

夏休みになり、今日は恵ちゃんに物理を教える日だ。課題を終えたら直接聞いてみよう・・・そう思つて、俺は待ち合わせ場所の図書館に向かつた。

図書館でひたすら勉強する恵ちゃんを見ながら、俺も自分の勉強をこなす。

どうやら説明文がよく分からぬみたいで苦手意識を持つてしまい、つまずいたらしい。

公式の使い方とか、法則などを俺が持参した参考書なども見せて、少し教えてみたら「先生より、分かりやすいです」と、とても感謝されてしまった。

「化学の橋野先生は、物理を教えるのも上手だよ。俺が在学中は俺が恵ちゃんに教えるけど、卒業したら橋野先生に質問してじらん。図書室に来たときでも。」

「いいんでしようか。担当科目以外のこと、聞いても」

「他の先生は知らないけど、橋野先生は大丈夫だよ。むしろ喜ぶと思う。」

「分かりました。土屋先輩が言つなら間違いなをそつですね」

「恵ちゃんは今度のデート、どこか行きたい場所つてある?」

「えつと、映画は趣味の合う人か一人で楽しむのが好きだし、遊園

地は絶叫系がダメなので・・・この間新聞で見た美術館の企画が面白そうだったので、行ってみたいですね。土屋先輩は？」

「美術館、いいね。俺もけっこつ見るの好きだよ。実は、俺も絶叫

系が苦手ですね。あと長時間並ぶのがつらいから遊園地もあんまり

なんだ」。じゃあ美術館にしよう。俺がチケット用意しておくれ。

「ダメです。おごつてもらうなんて悪いです。割り勘で。

俺はおごると何度も言ったのだが、恵ちゃんは譲らず・・・結局

折れたのは俺でした。

読みありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書こぢやおつかなと思つたら、ぜひ書いていただけるとうれしいです!!

信康と孝一郎は、今の彼女と付き合つまでの女性との付き合い方が微妙・・・。いい加減さではどちらもこい勝負。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0670x/>

---

図書委員会の恋愛事情

2011年11月6日10時11分発行